

---

# ドラゴン・パニック ～竜化症候群～

アグレイル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴン・パニック ～竜化症候群～

### 【Nコード】

N43830

### 【作者名】

アグレイル

### 【あらすじ】

ドラゴンウイルス。高校生の村田和人はその言葉を聞かされたところで全く信じようとはしない。信じるという事は現実逃避への扉を開けてしまう事になる。しかし、嫌でも現実逃避の扉は開いてしまふ。その先に待っていたのは、ドラゴンウイルスに感染した、人間の山。いや、人間ではなく竜の山だった。二度と元に戻る事が出来ないと言われる驚異的な新種ウイルス。果たしのこのウイルスの充満した世界を和人を含め、未感染者はどのようにして生きて行くのか？

## 第1章 ドラゴン・ウイルス

非現実的。例えば、人が空中浮遊したり、途轍もないほど硬い岩を拳だけで粉碎したりと様々ある。どれも現実にはあり得ない事。そんな事が現実世界でできてしまう事を非現実的という。もっとも今までそんな事例1つとしてない。ましてや、そんな事が起きれば、ニユースはそればかりを取り上げるだろう。こうも単純なニユースばかりとなるといつもと変わらないのは見てとれると思う。まあ、そんな滅多に起きない、というより殆ど0%に近いと言っても良い程、確率は低い。多分、小数点の位は裕に100を超えているだろう。でも、そんなに確率が低くても当たる事だつて。宝くじもその一種だ。当たらない物が急に当たったりすると吃驚するだろう。仮に非現実的な事が起これば吃驚というレベルでは済まされない。それもここ日本で起こればそれはさらに日本全国を震撼させる事となる。その事件の目撃者・・・というより被害者なる事をまだ誰として察知していないのはまた事実である。

「おい、村田！何ボオーツと外を眺めているんだ！今見るべきところは黒板だろ！？」

「え！？あつ、はい・・・すみません」

一人の生徒が先生に謝った瞬間、皆が笑いはじめた。その笑いにも怒りをぶつける先生。これ以上怒らせるとやばいという事なのだろうか、すぐに笑うのをやめた。正直なところ、こいつらぶつ飛ばしてやりたい。拳に力を入れながら、怒りを堪える。村田和人はいつも外を眺めてる。なぜかって？授業を聞いたところで分からないと

判断したからである。聞いたところで眠気に負けてしまっただけだ。それだつたら外を眺めている方が眠らずに済む。眠っていなければ先生はこつちに来る事はないし、叩かれる心配もない。しかし、あまり調子に乗っていると痛い目にあう。これは偶にあるぐらい・・・ぐはう!!!

「ちゃんと聞けと言っているだろうが!!!」

「申し分ないです」

でた、偶にしか出してこないチョーク投げ。今回は頭にもろに食らってしまったから、痛みが激しい。頭を押さえながら、机に俯く。痛みを耐えていると授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。その響きは心をリフレッシュさせてくれるかのような響きだ。勿論これは自分だけだと思う。さすがにチャイムでリフレッシュされるっていう人はそうそういないだろう。まあ、そこら辺が変わっているなってよく言われるが。てかい今何時間目？もう4時間目か？今の今までボオーっとしすぎたようだ。何せ1時間目の途中から既に外ばかり見ていた。いつの間に4時間目まで終わったのかっていう気持ちでいっぱいになった。でもこれはお得だ。ボオツとしていたらもう弁当の時間になっているんだから。こんなうれしい事はないな。和人はバッグから弁当箱を取り出し、とある席へと向かった。席の先には同級生の国定涼介が座っている。見た目は小柄だが、想像以上の力を持っている。どれくらいのかというと煉瓦を普通に割るという程である。当初は誰としてその力は嘘と感じていたらしいが、それにプツンとなった国定はみんなの目の前で、煉瓦の叩き割りを披露した。勿論、煉瓦は粉々。それを見た連中は啞然としていたらしい。まあ、その顔の受ける事。自分は最初から信じていたから、そこまで吃驚はしなかった。あれ以来、国定は学校一の人気者になった。え？どうして国定と一緒に弁当を食べるか？それ

は簡単な事。自分と国定は小学校時代からの友達にあたる存在である。いつも2人で遊んでおり、何処の友達よりも信頼しあっている。・は。・はず。まあ、ちよつと話を盛りすぎたな？何処よりもって言うのは嘘として。とりあえず友達なんだ。それ以外の何でもない。いつもならたわいのない話をして終わりだが、今日の国定は何か違って見えた。自分に何かを訴えかけているような表情をぶつけていた。正直自分にそんな表情をぶつけてきてどうしようって言うんですか？まず何かを言ってくれないとどう仕様もならないかとすると国定が口を開いた。

「村田、あの事、知っているか？」

「なんだ？あの事って？埋蔵金とかそういう話？自分はパスしたい」

「馬鹿。そんな話じゃねえよ」

「じゃあ、何？」

「ドラゴン・ウィルス。お前この言葉に聞き覚えはないか？」

全く分からない。寧ろ初めて聞いたわそんな言葉。ドラゴン・ウィルス？いかにも誰かのいたずらっぽいやとを感じる。何処でそんな事を聞いたのかってこつちが聞きたいほどだ。でもここは話を最後まで聞いてみる事にした。

「自分は聞き覚えがない。それって何だ？都市伝説か？」

「くわしくは知らないんだけどよ。日本の何処かで発生した。新種のウィルスらしいんだ」

もうそれ、都市伝説だろ？それ以外のなんだと言つてやりたい。そんな事を信じるなんて国定もまだまだだ。そんな事だから、中学校の時は変な奴つて言われていたのじゃないか？まあ、その性格は今も変わらないのが国定のいい所かもしれないが、自分的には早急にも治してほしいと思う。思うじゃない、治せ。

「そのウィルス・・・感染すると、竜になつちゃうだとか・・・」

「ふん・・・で、竜になつて人間には戻れるのか？」

「いや、強いウィルスで、人間の身体に入り込むと、竜の身体を人間の身体の中に形成していくらしい。しだいに人間の精神は竜の精神と繋がり、竜の姿になつてしまつてという話なんだ」

鼻で笑つた。よくまあ、そんな事が信じられるなと感じた。言つてみればそれは完全に現実逃避だ。国定は特別に頭がいい訳ではないがこれは酷過ぎるだろ？だって、現実と非現実を区別できていない。今、国定の頭の中では何を根拠にそれが現実だという働きをしているのだろうか。今すぐにも頭の中を見てみたいものだ。

「お前も気を付けとけよ。今政府が対策を練っているが、未だにいい案が出ないらしい。普通だつたら学校も閉鎖するはずだけどね」

「はいはい・・・閉鎖する前にお前の頭を閉鎖するべきだと思う」  
そう言い残し、自分の席へ戻る。国定の頭を殴つてやつたら元に戻るのかなと思つたが、それは止めた。殴つても何も出ない事は分かっている。ただ単に相手を傷つけるだけだ。それはよくないと自分の中では常識なのだが、他の人は違つらしい。まあ、その人はどう

だろうか？常識を知らないというか、優しい気持ちを持たない。いわば悪魔だ。いつも同級生のいじめっ子を見るたびに悪魔が脳裏に浮かぶ。正直顔を合わせるのみ嫌だ。だって、悪魔に睨みつけられているみたいだから。それはよしてほしい……。石になったらどうするんだよ！あっ、それはメデューサか。何処で思考が狂ってしまったのか……。

考えるだけで頭が痛くなるから。とりあえず、寝る。もうすぐ授業だけど気にしない！そう言うで一気に眠りに着く。目を覚ました時には既に6時間目の終わりだ。こんなに寝てしまったのかと、反省の反面、自分の睡眠の脅威に驚く。ホームルームが終えると一気に廊下を駆けぬけて、そのまま昇降口へ。

だが、すぐにバテル。自分の体力のなさに愕然。でもまあ、それはしょうがない。人は人それぞれ。和人は前を向き、自分の家へと歩み始める。ここ、日高町の日高第3高校から家までは徒歩で20分。他の人に比べればそんなに離れた距離ではない。家に着いて最初に発した言葉。

ただいま！って誰もいなかった。今は一人暮らしだった。何で、ただいまなんて言ったんだろう。でもこれが初めてじゃなかったな。今は親の元を離れている。今いる場所は生まれ故郷ではない。親の家からはここは離れ過ぎていた為、家を借り、暮らしている。だから、家に誰もいないのは当然である。

和人はその事を確認したうえで、リビングのソファに腰かけた。これといってきつい事をした訳でもないのに身体が悲鳴を上げている。

「あゝ身体痛い。これはどういう事ですか？誰か背中に乗っているのか？」

借りに乗っていたとしてもそれは背後霊か、守護霊。正直呪縛霊が憑いていたら真っ先に神社に行ってお払いしてもらおう。あれ？お払いって寺だっけ？この際どっちでもいいから背中に着いている悪い

霊とつてくれ。じゃないと、重い。空気だけど重い。まあ、それはないか……。という訳だから今日は飯食って風呂に入って寝ます。正直、パソコンを開く気になれない。と言いつつテレビの電源を入れる。この時間帯はニュースばかりの時間帯かと思つて、チャンネルを変えようとした。しかし、その思考はプツリと切れた。どうしてかつて？今見ているニュース番組。かなりふざけている。

普通のニュースキャスターと普通のアナウンサーの間に何故か勇ましい竜。しかも、何故か原稿を読み上げている。こんな光景あつてはならないだろ？てかない！他に考えられる事はただ一つ。ふざけている。皆が現実で起きている出来事をチェックする場所でなんて恰好で原稿を読んでいるんだよ。こいつ殴つてやろうか。いや、殴るだけじゃすまないな……。縛り上げて、拷問。そんなことしたらこつちが捕まるか……。でも、普通だつたら、この人をすぐに追い出すはずだがなぜか、他の人は平然として他の原稿を読み上げている。次は天気予報ですなんて呑気な事も言っている。まず、竜に吃驚するのが普通だろ？どんな神経持っているんだよ、このニュース番組の人は！？まさか、鈍いだけなのか？それは考えられない。だつてこの竜。“さあ次は新コーナー。竜になつた藏石真一の日本ぶらり飛行の旅です”何がぶらり飛行の旅だ！？つてか自分で竜つて言っているし！？もう、何だよ、これは夢か？そうだよ！夢だ！！！！うわ~~~~~~~~！！！！

ズシン

気付いた時にはソファから転げ落ちていた。やっぱり夢か。そうだよ。あんな事、あつてはならない事だよ。それにしても……。腰が痛い！強く打ちつけすぎだろ！なんでこんなにソファ高いんだよ！！！！つてそんな事嘆いても何も変わらないか……。気を取り直し、飯を済ませ、風呂に入ると、ベッドにダイブ。そのまま寝音をたて、眠りに着いた……。この日が、普通の日最後となる事は未

だに誰として気付くものがない……。そして、運命の時は村  
田和人の人生を揺るがした。

## 第2章 ドラゴン・パンデミック

いつも通り、起床したら学校。いつもと変わらず、欠伸をしながら登校。正直、今日は休みたい気分だ。完全に眠れていない。というより、浅い眠りだったから、明け方に起きてしまった。二度寝しても1時間ほどしかたっていない。結局6時ごろから起きていた。この眠気どうにかしてほしい。人にうつらないかな？って風邪じゃないか。それにしても今日はやけに人が少ないな……。いつもなら賑わっている道も今日は何かが起こったかのように静まり返っている。勿論自動車なんて一台も通っていない。不審に思ってもみんな寝坊だろうなと簡単に片づけて、学校へと向かう。

いつものように教室に入ろうとするが、ある事に気付き立ち止まってしまう。教室内部には自分を含め数名しかいない。みんな遅刻か？いや、そんなはずはない。いつもならこの時間に來ているのがほとんどだ。自分が着いている頃にはみんな着席しているはず。それが今日はどうだろうか。殆どの席が開いており、スカスカした状態だ。インフルエンザ？いや、それもあり得ない。あれが最も流行るのは秋。今は夏真つただ中だぞ！？夏休みも近い時期だぞ？こんな時期に風邪が流行る事は考えにくい。

「和人さん、これはどういう事ですか？」

和人に話しかけてきた1人の女子。倉島涉子くらしましようこだ。滅多に話す事はないが今回ばかりは人数が少ないことと今の現状を聞く為に話しかけてきたのだと思う。勿論、こんな状況になった理由なんて知る訳がない。もし知っているのなら寧ろ教えてほしいところだ。

「さあな、自分には理解できない。集団遅刻とかそんなんじゃないのか？」

「そんな事をする意味はありますか？メリットはありますか？」

頭を掻きながら

「そんな事、知らないよ。てかメリットがある訳ないだろ？他の連中が遅刻してしまうだけなんだから」

会話をしていると、A担任が入ってきた。和人は足早に席に着いた。勿論、先生もこの光景を見て戸惑っていた。無理もない。こんな光景、インフルエンザが流行してもあまり見る事がないだろう。見た限り、今ここ、2年5組の教室にいる生徒は僅か4名。そのうち、男児生徒は自分だけ。紅一点の反対だよ。

「なんだ？この生徒の少なさは！？和人、何か知らないか？」

「何故自分に聞くのですか？」

「お前が何でも知っているのかと思って」

勝手な発想ですか。自分は神じゃないんだから、何でも知っている訳じゃないんですよ。

「まあ、どちらでもいいが、この状況では、授業はまともにできないだろう。したがって、学級閉鎖とする。他の奴はこちらから連絡を取っておく」

思った通りの結果だった。この状況で学級閉鎖にならなかつたらどうなっているんだよと言ってやりたかった。でも正直、みんなはどうしたのだろうか？集団遅刻なんてする訳がない。中には成績が優

秀な奴、無遅刻無欠席の奴、病気になんてかからない元気な奴がいっぱいいる。それなのにあの生徒の数。おかし過ぎる。どうしたのかなと思つた和人は教室を飛び出した。よく見ると、他の教室からも生徒が出てきていた。手にはバッグ。そして向こうの階段からは3年が降りてきた。予測、他の学年も学年閉鎖なら学校の約3分の2はいないという事になる。数にしたら300人を超えているはず。一体何があつたんだ？こんな所で考えていても何も出てこない。そう思つた時だつた。あの倉島が突然倒れた。和人は吃驚しながらも倉島に駆け寄つた。何で突然倒れたんだ？発作か？それだつたらやばい。和人が倉島の腕を掴もうとした瞬間だつた。急に腕に痛みが走つた。途轍もない痛み。うぎゃあ！？なんだ？なんだよ！この痛みは！？もう片方の手で痛みが走る腕を押さえていた。指からは血が滲み出ていた。一体どういうこ・・・はあ！？倉島！！？

和人は倉島を見て驚愕した。倉島の腕には鋭く綺麗な赤い輝くもの。それに見覚えがある。鱗。何故か鱗が倉島の腕を覆つていた。しかも鱗は次々と現れ、最後には右腕を完全に覆つた。変化はそれで終わりではなかつた。鱗の侵食は顔や体にまで達している。それと同時に身体が大きくなっていつている事に気付く。これは一体どういう事だよ！？自分、何かしたか？いや、何もしていない！なのにとうしてだ？その場に倒れ込み後ずさりする。その間に島倉の身体は2メートルを超えていた。変化はさらに続く。頭からは2本の角。口には鋭く綺麗に並ぶ牙。背中からは制服を突き破つて巨大な翼。さらにスカートの下からは長い鞭のような尻尾が姿を現した。そして何でも踏みつぶしそうな大きな足。変化には痛みを伴つていたのか倉島が叫んだ。

グギヤアアアア

それは竜の鳴き声に等しかつた。しかも至近距離にいた和人にはそ

の声は鼓膜を破るかのような大きさだった。こんな所で叫んでほしくなかった。耳がおかしくなりそうだ！今にでもここから逃げ出したいが身体がいう事を聞かない。なぜだ！？というより自分で動くのを拒んでいるのか？そんな中、ようやく変化が治まったようだった。そこにいたのは島倉の姿ではなく。赤い鱗におおわれた巨大な竜だった。いくつもの机が大きな巨体に押され移動していた。そんな事には目もくれない。なぜなら目の前には架空生物の竜がいる。これこそ現実逃避だ！夢だ！頬を思いつきりつねる。痛みにも痛んだ。しかし夢ではなかった。こればかりは現実で起こった事らしい。しかし、受け止めきれなかった。勿論和人だけではない。その光景を目撃していた他の奴らも一緒だった。しばらくすると竜が目覚めた。まず竜が見たのは和人だった。蛇に睨まれた蛙状態。身体が動かない。硬直している。これは・・・メデューサ？いや、石にはなっていない。ってこんな所でそんな事を考えている自分はいったい何だよ！緊張感を持って！緊張感を持って！！その瞬間、竜が口を開いた。

「和人さん・・・私、どうしちゃったのですか？」

和人はさらに焦った。竜だから低い声が出るかと思ったら、綺麗な女の声。しかも聞いた事がある。これは・・・倉島だ。この竜、身体は竜だが、中身は倉島涉子みたいだ。それによりさらに頭がパニック状態に陥る。今日の前にいるのは竜であり、倉島である。竜だ  
が倉島。竜、倉島、竜、倉島、めんどくせー！！！！！！！！！！

思わう叫んでしまった。竜はそれにビビって後ずさり。竜が後ずさりって珍しい。って言っただけじゃない。一刻も早くどうにかしなければ！とりあえず倉島に心当たりがあるか聞いてみよう。そうすれば何か手掛かりがつかめるかもしれない。考えが纏まり質問しようとした時だった。倉島の方が口を開く。

「やっぱり・・・出てしまいました・・・」

「やっぱり？何か心当たりがあるのか？いや、なければそんな事は言わないはずだ。」

「倉島、何か心当たりがあるのか？」

「ドラゴン・ウィルス・・・ですよ・・・」

ドラゴン・ウィルス？何処かで聞いたような・・・ああ！！昨日国定が言っていた奴だ！！あいつの言っていた事本当だったのかよ！？あいつの事色々言ってますまん！！国定！とりあえず、謝る！！！！って今は倉島の事の方が大事だった！！！！

「ドラゴン・ウィルスにはいつかかったんだよ！？」

「昨日の夜です・・・何か体がむずむずしていましたがすぐに治まったから気にしてはいませんでしたけど、まさか、ドラゴン・ウィルスだったとは・・・」

鱗が形成されていたようだ。だから身体がむずむずしていたんだ。そして今日の朝、行っている事が完全に正しければ神経が完全に竜と繋がった。そう言う事になる。理屈がめんどい！！！！！！！！てか、非論理的だ！！！！！！

「あの、取り込みすみませんが・・・後の方たちも」

「ま、まさかね」

和人は振り向く。しかし、予想は的中だ。他の人間だった奴らも既に竜へと変貌していた。青、緑、黄など様々な鱗の色。まるで虹だ。つて今の状況が分かってこんな事をしているのか自分!?

「嘘だああああ!」

和人は大声を出しながら、教室を飛び出し、昇降口へ。そのまま、家へと突っ走って行く。よく見ると、数は少ないが、歩いているのも、飛んでいるのも竜だった。これ以上自分の頭をおかしくしないでくれ!!!イカレテしまう!!!頭を押さえながら、全速力で走る。家に着くと、鍵を閉めた。玄関の扉に凭れかかってそのまま座り込む。大きなため息をつき、上を見上げた。この状況だと、他の奴も竜になっているはず。だから学校に来るのが嫌だったのだろう。もし、本当にドラゴン・ウイルスがあるとしたら、既に自分にも感染しているかもしれないっていう事になってしまう。それだけは本当に勘弁してほしい……。普通の人ならそう思うだろう。立ち上がり、リビングに設置してあるテレビを付けた。勿論、そこには竜、竜、竜。そりゃ、当たり前だ……。想像以上に感染力が強いみたいだ。ニュースによると全国でこのウイルス感染が多発している。この調子じゃ自分以外の人間は既にもいないのかな?それどころか、自分も近いうちに竜になってしまうのか?はっ、親は?自分の妹は?どうなっているんだろ?しかし、今更心配してももう既に遅かった。パソコンに送られてきていたメールで分かった。母親は緑、父親は青、そして妹は黒色。既に竜と化していた写真も同封されていた。頭痛がしてきた。正直、もう何もする気が起きない。こんな状況で、何かをしようと考えても精神面で押しつぶされてしまう。もう状況的には崖っぷちだ。こんな世界求めていない。どうかしている。そもそもドラゴン・ウイルスって何だよ?何でそんな病原菌が……。でもこんな状況でも確信できる事がただ一つだけある。ドラゴン・ウイルス。確かに実在した。

### 第3章 非感染者

時刻は8時15分。和人は走っていた。制服姿で、何も持たずに。朝っぱらから鳴り響く電話にいら立ちながら、出てみた。学校からでした。最初に放った言葉が、誰だよ？これいけないと思う。先生に向かつて誰だよって言ったら、当然叱られる。それが当たり前でも今回は謝ったおかげで何とか許してもらえた。で、なぜ学校から電話がかかってきたかというところ、臨時集会を行うという事。かなりめんどい。今の状況で臨時集会を開く事には納得をするが、なぜ学校で行う？そこら辺がまだ理解できない。ただそんな事で苛立っていてもしようがない。とりあえず学校へ行こう。という事で、授業も何もない為、手ぶらで走っていた。学校に着いた時、異様な空気が漂っている事に気付く。正直、帰りた。でも、集会に参加しないと、何を言われるか分からない。いやいやながら、とりあえず教室へと向かった。鍵は開いていたが、誰もいない。それもそのはずだ、昨日あれだけしかいなかったんだ。残りも奴もあのウィルスに感染してしまっただのかな？そう思いながらとりあえず席に着く。集会は8時30分からの事。それまでまだ時間がある。いつものように外を眺めていた。自分以外に人間はもういないのかな？そうすると不安だな。自分だけ人間。なんか、立場が人間から動物になっただよな気分だ。気持ちいいものではないな。頭の中でそう感じていた時だった。スピーカーから放送を告げるチャイムが鳴り響く。和人はそのスピーカーに耳を傾けた。

ピン ポーン パーン ポーン

“連絡します。2年1組、はせがわゆうだい長谷川雄大くん、2年4組、きはらあやせか桐原彩夏さん、2年5組、村田和人くん、大至急、体育館へ来てください”

ピン ポーン パーン ポーン

呼び出し連絡だ。いや、体育館で集会があるのは分かっているから、呼び出さなくてもいいと思う。てか普通呼び出すなら、体育館じゃなくて職員室だろ！？愚痴をこぼしながら、教室を出た。すると、他の教室からも誰かが扉を開ける音が聞こえてきた。その方向を見たとき、自分は目を疑った。そこには、長谷川雄大と木原彩夏の姿しかもドラゴンではない。人間の姿だ。和人は自分以外に人間がいた事にホツとしていた。しかし、他の二人は今の状況を把握していないようだった。長谷川と桐原とは中学時代に知り合った友達だ。そんな奴らが人間のままでいてくれた事に感激した。2人はまだ、理解していない。2年5組の教室の前にいた和人に今の現状を聞くため駆け寄ってきた。

「村田、今何が起こっているんだ？外には誰もいないし」

「教室にも、私と長谷川さん。そして村田さんしかいないみたいですよ」

「そうか、お前らいなかったんだっけ？」

「俺は昨日、新潟から帰ってきたばかりだ」

「私は昨日、おじいちゃんの一週忌でしたから・・・」

「そうか、今の現状、本当に受けがたいものとなっている・・・でもここで話していてもしょうがない。とりあえず、体育館へ行こう。じゃないと先生が怒鳴るし」

そういうと、話を半ば強制で終了し、体育館へと向かった。他の教

室も誰もいない。やっぱり皆、竜になっちまったのかな？そう考えると、竜の数は途轍もなく多い事になる。想像するだけで身震いをする。その身震いの意味を理解できないのが約2名。そのうち分かると思うが、どんな反応を示すだろうか……。いい方に唆さないと、こいつらの精神も狂ってしまうかもしれない。でもどう唆したらいいものか……。いいアイデアが浮かばない……。まあ、その時はその時だ。無理やり、考えをまとめた。そして体育館へと着いた。和人はある事に気付く。やけに騒がしい。話し声が絶えない。みんなまさか、集まっているのか？2人をしり目に、体育館の扉をそつと開けてみた。地獄絵図の様だった。竜が整列して他の竜と喋っている。あり得ない光景だ。翼を他の竜の顔にあててしまつて謝る竜もいる。こんなの嘘としか言いようがないが、これが現実だ。これ、見せたらどうなるものかと思うが、もう逃げ場はないと思う。腹を括つた。

「2人に告ぐ。この先、非現実的な光景が広がっていても精神的には大丈夫か？」

「非現実的？そんな事で俺がビビるとでも？ドンとこい！！」

「私は大丈夫です。ドラゴンがいてもヘッチャラです」

「その桐原の放つた言葉、今ここにあり」

「「えっ？」」

「オープン」

和人は扉をあけた。その勢いで扉は壁にあたりもの凄い音を立てた。その音に反応したのか一瞬で静まり返つた。竜達の視線は和人達に

くぎ付けだ。竜達も驚いているが、一番驚いていたのは長谷川だった。

「りゅ、竜！？マジかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！襲わないでくれ！襲わないでくれ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「お前さつき、ドンと来いって胸張っていたくせに、いざこづいう立場になったらそれかよ・・・」

「だって竜だぞ！？人間、襲うんだぞ！？これがじつとしていられるか！？」

「とりあえず落ち着け。こいつらは襲ってこない。少なくともいじめっ子以外は」

「どういう事ですか？」

「こいつら、元人間。しかもこの学校の生徒だ。自分の勘が正しければ」

その言葉に仰天する長谷川と桐原。正直なところ、自分も仰天しかねない。でも現状が分かっている以上、仰天しろって言うても難しい事である。ここは受け止めるべきだと思う。でも自分と桐原を含めてまだ受け止めていない。勿論、竜達も。そんな彼らに近づくと一匹の竜。どうやら先生の様だ。

「お前ら、まだ人間なのか？どうして人間のままなのか？」

「いや、単純にまだあのウィルスに罹っていないとしか言いようがない」

「村田さん。この竜は？」

「多分、先生」

「まあ、いいとりあえず自分の場所に行け」

先生竜が振り返った時だった。太く長い尻尾が和人の右脛を直撃。勿論痛い訳がない。

「あゝゝゝいててててて！！！！あゝゝいててててて！！！！」

痛みを紛らわすためか、その場を走り回る和人。その光景を見て、竜達が笑いだす。和人はというと痛みを堪えながら一言発した。

「笑ってんじゃねー！！！！！！」

竜に向かってよくこんな事が言えるなど感心する長谷川と桐原、2人は自分の場所へと着いた。和人も痛みを抑え、自分の場所に座る。四方八方竜に囲まれている。ファンタジーの世界だったら、確実にやられている。そう考えると、見つめられるだけが軽いと思った。しばらくして集会が始まった。始まってすぐに感じた事、狭い。体育館にこんなに竜を入れるとは先生もどうかしている。人間用に作られたから、竜にとっては狭すぎるだろ。おまけに自分だけ背が低い。竜達は2mから3mはある。完全に見下されている。身長が低い自分にとっては尚更だ。集会の内容。これからの間、学校はしばらく閉鎖。この病気の事が分かり次第、再開するという事。正直何になるっていうんだろ……。この病気の恐ろしい事は分かっているだろう。もう人間には戻れないんだぜ？それなのに分かり次第再開って……。将来に響くからやめてくれて話。ってこんな所

で自分の将来の話をしてどうする。そう思っているうちに集会は終わった。解散と言われた瞬間、竜達は一齐に体育館を出た。和人はぶつからないようにと身をかがめていた。何をするのだろうか、外を見たら、空を飛んでいた。みんなはしゃいでいる。あれはなんだろう？俗にいう、空中鬼ごっこか？竜なのに完全に無邪気を領域だ。みんな楽しそうだ。それもそのはずだ。人間大体の人は空を飛んでみたいと思ったはずだ。それが今実現されているから、嬉しいのだろう。今のところ約3名ほどはその夢がかなっていないけどな。。。簡単にいう、人間の生き残りだ。和人達は3人で自分の家に集まった。今の状況を話す為だ。

「なあ、どうなっているんだよ？いま日本はどうなっているんだ？」

「まあ、なんて言うんだろうな。その、病原菌となっているドラゴン・ウィルスに感染してしまったせいであんな状況になっている。ここ、福岡だけの問題じゃないと思う。全世界の人間は竜になっているだろうな。。。。」

「でも、よくねーか？飛行機なんか使わなくてもいつでも好きな場所に行けるって」

「まあ、その辺は利益に値する事だが、損益に値する事もある」

「それはどのような事ですか？」

「日常生活に支障が出るだろう。今まで人間の姿で生活してきたんだ。それがこれからは竜の姿で生活しなければならない」

「成程、料理とか、風呂、その他いろいろな面が難しくなるっていう事か」

「まあ、そういう事になる」

表情は変わらず、険しい。どうしてかって？いつだれかがまた感染して竜になるか分からない。自分は倉島が竜になる瞬間を見ている。あの時の倉島、悲しそうだった。しかし、今日は笑顔が出ていた。しかしそれが本心とは思えない。表に出さないだけで、本当はすごく悲しんでいるのかもしれない。そのところがよく分からない。相手の本当の気持ちまでを読み取るとは人間には難しい事だ。

「他にもいないのですか？感染していな人は・・・」

「さあ？そこら辺はニュースとかで情報を見ない限りは分からないだろう・・・」

「じゃあ、つけてみるか」

「人の家のテレビを勝手につけるなよ」

そういうも既につけていた。なんて手の早い奴だ。テレビに映し出されたのはニュースアナウンサーだ。いつものように原稿を読んでいたら突然、速報が入ってきた。和人達はその速報にくぎ付けとなった。

“速報です。たったいま、ドラゴン・ウィルスに感染していない人が兵庫県、淡路市の高校。福岡県、北九州市の高校で確認されました。これまでに感染していない人の情報を確認しておりません”

プツン

急に電源を切った。その行動に戸惑う長谷川と桐原。

「何で切ったんだ？テレビに出るなんてそうそうない事だぞ？」

「今の状況でよくそんな事が言えるな……。今はテレビに出るなんてどうでもいい。それより、他にもまだ感染していない奴がいたんだ」

「どうするつもりですか？」

「あつてみようじゃないか。多分あいつも会いたいと願っているんじゃないか？周りが竜ばかりでうんざりしてるか絶望しているに違いない」

「その核心は何処から出てくるんだよ……。それに淡路市って淡路島だろ？そこまで行く金、村田持っているのか？」

「持っていないかったら言っていないし」

和人は決心した。淡路市に行く事を。長谷川と桐原も和人の意見に同意した。確かに行くのに金はかかる。でも金と日とは比べ物にならないほど差はあると感じた。和人達は明日行く事を計画し、色々な事を言い合った。何を持っていくとか、どの辺から調べていくとか。そんな話をしていたら、既に夜を迎えていた。ある程度の事は決まったので、2人は急いで自分の家へと戻って行った。見送りを終えた和人は用意を始めた。荷物はお金とリュックにもしもの為の必需品などを入れた。用意を終えると、ベッドに横になった。体力回復を願い、眠りに着く。この行動、和人達の人生の歯車を狂わせていく。

#### 第4章 真の力 それは身体能力!?

朝6時55分。和人は小倉駅から新幹線へ乗り込んだ。他の二人はどうしたのか？何か重要な用事が出来たとかで来れなかった。仕方ないから自分だけで来た。新幹線内部は予想通りに席がガラガラな状態であった。少なくとも、竜が座れそうな座席はないが・・・。ただそれでも新幹線に乗り込む竜はいる。その場合、席を2つとってしまう。頭が天井に当たっていた。まあ、それはしょうがないだろう。今となつては。乗り込んで数分、新幹線は扉を閉め、走り出した。まず和人は、姫路駅へと向かった。姫路駅は淡路島から一番近いと思われる新幹線ホームのある駅。2時間ぐらいで駅へと着いた。和人は急いで、山陽本線のホームへと向かった。ここから、電車を取り換える。しかも次の西明石駅でも乗り換ええないといけない。なぜって？行き先が違うから。もしそのまま乗っていたら、目的の駅、舞子駅を通過してしまうのかもしれない。正直、鉄道の知識は乏しい。まあ、行ければいいんだ。

あっさり不安を押し退け、ホームに滑り込んでくる長浜行の電車に乗り込んだ。現在は兵庫県の中。見た事のない住宅街や施設が車の向こうに点々としていた。その光景を眺めていたら、すぐに西明石駅に着いた。そこから電車を乗り換え、舞子駅へ。右手には瀬戸内海が広がっていた。島が点々としている。本当に島だらけだな。無人島ばかりか？いや、人が住んでいる島もあるか。舞子駅に到着。ここからは鉄道の旅を終え、高速バスに乗り込む。しばらく外を眺めていると、バスは明石海峡大橋へと入った。明石大橋は兵庫と淡路島を結ぶ巨大な橋。そこからは広大な瀬戸内海を見る事ができた。電車に乗っていたときに見たものとは比べモノにならなかった。こんな所が日本にもあるっていいね。和人はその絶景に癒されていた。しばらくし、バスは北淡ICに到着した。ここからは徒歩で淡路市を目指す。今自分は、淡路島にいる。社会で習ったあの淡路島に。

行く事はないかと思っていたけどまさかこんな形で来るとはな。できたのなら、みんなが竜になる前に来たかった。そこら中、竜が飛んでいる。気になってしょうがない。でも足は止めない。ひたすら前へと進んでいた。歩く事1時間。目の前に淡路市と書かれた看板が姿を現した。やっと着いた！和人は手を上にあげて喜んだ。だがここで問題が。

「来たのはいいけど・・・場所が分からない。どうしたものか・・・」

来る事に必死でこれからの事を考えていなかった。その人間は今どこにいるのか分からない。ただ、淡路市の高校の生徒だという事だけが手掛かりだった。その場に立ち竦んでもしょうがないからとりあえず国道に沿って歩いた。普段の住宅地とはまた違った空気が漂っている。家の並びも違うし、店も少ない。しばらく周りを見ていたら、公園にさしかかった。その公園には竜が数匹いた。普通ならスルーするはずの竜だが、何か様子がおかしい。数匹の竜が何かをとり囲んでいる。何だろうと思つて、和人はそつと近づいた。すると竜達の会話らしき声が聞こえてきた。いや会話というより、虐め的な悪口に近かった。

「お前、竜じゃないね〜ダッサ!!!」

「よくそんな姿で表を歩けたもんだ」

「生意気だ〜!!!」

ドカツ バキッ

竜達は何かを蹴とばしている。和人は竜達の隙間から何を蹴ってい

るのかを覗き込んだ。それを見て驚愕した。人間だ。あれは、ニユースでやっていた奴に違いなかった。あのニユースが発端なのだろうか？酷いいじめを受けていた。見たところ、額から血を流している。これは危ないと感じた和人は、自分の身も考えずに飛び出した。

「お前ら！！」

「なんだ？おお、まだ人間がいたのか。こいつの仲間だな」

「まだ竜になっていないなんてどんな体質してんだ？こいつ」

口調からしてチャラ男に違いない。よくまあ、こんなひどい事ができたものだ。和人は怒りがたまってきた。和人は人をいじめる事が嫌い。だから、今の事も放っておく訳にはいかなかった。

「お前ら、今すぐ、そいつを開放しないとただじゃおかないぞ！」

「お前、今の立場知っててももの言っているのか？」

確かに、今の相手は竜、体長は和人の約1.5倍ほどだ。身長差は裕に70センチはある。そんな奴を相手にするなんて正直なところ、無謀すぎる。でもそれが和人の武器でもある。無謀は時に和人の怒りのボルテージを最大限にすることもある。それは切れたらの話だ。

「貴様。口が悪い！やってしまえ！！！」

「「「おう！！！！」」」

その掛け声とともに4匹中、3匹の竜が突っ込んできた。和人は逃げようとしな。何かのタイミングを待っているかのようだった。

竜が数十センチ手前まで来たときに和人が動いた。しかし、竜は既に手の届く場所にまできている。しかし、焦らず、3匹の竜の隙間に身体を入れ込んだ。竜達の風圧を受けるも、それだけですみ、怪我1つ負っていなかった。その光景を見たもう1匹の竜は驚いていた。勿論、後ろにいた人間もだ。

「貴様！？何者だ！？」

「何者って、普通の人間だ。ただ身体能力ははずば抜けているけどね」  
和人の真の力。それは人一倍、身体能力と回避能力が高いという事。攻撃面に関しては人より衰えているが、虐めを受けていた時に自然と、身体能力が付いてきたという。戸惑うも、さらに攻撃をしてくる3匹の竜。それを華麗に避ける和人。避けるや否や、傍に落ちていた鉄パイプを手を取った。そして、1匹の竜の脳天を思いっきり叩いた。

「グギヤア！！！！」

凄い悲鳴と共にその場に倒れ込むチャラ竜。どうやら気絶したようだ。すると、1匹の竜が凄い形相で突っ込んでくる。今度は一筋縄ではないかない。竜は両腕を広げ、逃げる範囲を少なくしていた。しかし、和人は迷わず、行動に出た。何を思ったのか突っ込んでいく。

「馬鹿め！！俺様の餌食となれ！！」

「悪いがそれは無理！！！！」

和人は竜の手前で、鉄パイプを棒高跳びのように地面についた。そしてその反動で、身体は宙を舞った。鉄パイプを持ったまま、空中

で身をかわした。そして、着地すると、竜に目掛けて鉄パイプを投げた。竜はこちらを向いた。鉄パイプが顔面にクリーンヒット。そして気絶した。それを見た。3匹のうちの1匹の竜はその場から逃げ出した。人間の前にいる竜もビビり始めた。そして。

「お、覚えていろ!!!」

そう言い捨て、その場を立ち去った。完全に見えなくなると一息ついた。和人は心の中で1つ感じていた事がある。自分、竜に勝った。負けると思っていたが、身体能力のおかげで勝った。と喜んでいる暇はない。和人は傷ついた人間に駆け寄った。

「怪我はないか？」

「なんとか、助けられてありがとう」

「無事で何よりだ。とりあえず、頭に包帯を巻いておくよ」

そういってバックから包帯をとりだした。もしもの為に入れておいたのが役に立った。包帯で彼の頭の傷を覆った。彼は小さく会釈した。と何かに気付いたような顔になった。

「もしかして、ニユースでやってた。福岡県の……」

「そう、北九州市の人間です。現在、北九州第2高等学校に通っている。村田和人です。兵庫県にまだ感染していない人間がいるという事なので会いに来てしまいました。ちょっとめざわりだったかな？」

「いや、大歓迎だよ！周りは竜ばかりで絶望していたから……」

「やっぱりうんざりしていたのか・・・それもそうだよな急に人間がいなくなつて皆竜になつちゃうからな。無理もない・・・」

「ここに一人で来るなんて、正直言つと無謀だよな」

初対面で無謀つて言われた！？初対面なのに！？自分つて何処まで無謀つてという言葉がくつ付いているんだよ。この言葉、今すぐ焼却！！この世界からその言葉消えろ！！あつ消えたら自分の武器がなくなる。つて言つても言葉は武器にならないか。

「そういえば自己紹介まだだつた。俺はひやまたいち 松山太一。淡路商業高校に通っている高校2年生だ」

タメだ。まさかのタメ。まあ、その方が離しやすいからいいけどな。先輩とかだつたらどうしようかと思つていた。ちよつと安心した。ところでどうしてここにいるんだらう。家から出なければ襲われる事もないのに・・・。

「どうしてここに？家にいた方が安全じゃないのか？」

「家ね・・・崩壊した」

「えっ？崩壊！？どゆこと？」

「一人暮らしをしていた俺の家の丁度真下で地盤沈下が発生してさくいや驚いたよ。急に下がつて行くんだもの。幸いにも俺は平気だつた。でも家は修復不可能だつてさ」

「それつていつ？」

「昨日。家はここから離れているけどね」

昨日地盤沈下が発生した？異常気象？まさか・・・皆が竜になったからって・・・そんな事はないだろう・・・でも何か嫌な予感があるのは事実だ。またその地盤沈下は起こるかもしれない。それだったら調べてみる必要もあるかもしれない。こんな事を考える「まともや無謀な事を考える。また無謀の言葉が・・・。頭から離れる！！！！」

「どうしたんだ。何か考え事？」

「いや、その地盤沈下が気になる。自分のなんだろう・・・危険察知的なものが凄く反応している」

「どういう事？」

「とりあえず、その地盤沈下があった場所に案内してくれないか？」

「OK」

松山は和人を地盤沈下であった場所に連れて行った。そこまで距離がなかったのか、すぐに着いた。ついたと同時にすぐにその光景に目を疑った。地面は陥没している。家も傾いているものや、既に倒壊したものの、倒壊寸前のものもあった。正直凄まじい光景だ。予想をはるかに超えていた。

「すげえ・・・この地盤沈下・・・ただ者じゃない！！！」

「いや・・・自然の現象だから・・・者じゃないし・・・」

そう思った矢先だった。地面が突然揺れ始めた。地震か！？最初はそう思った。しかし、何かが違う。何か途轍もない者が蠢いているような気がした。すると、目の前のアスファルトを突き破り地面から巨大な身体が現れた。それは石の様な鱗におおわれている。体長約6メートルほどの巨大な岩石竜だった。その光景に硬直&放心状態になってしまう。まさか・・・こんな竜がいたとは・・・。戦いの火ぶたが見え隠れする。和人は硬直のさなかそう思っていた。

## 第5章 脱出！淡路島

淡路島の淡路市、現在地盤沈下発生のもので巨大な岩石竜が出現した。島全体に避難勧告が出された。しかし、岩石竜をまのあたりにしている和人と松山は未だ動けずにいた。相手は元人間だと思う。にしてもでかすぎる。大人何人分だよ!? しかも何故か威嚇しているように見える。発狂か?それとも竜になったことで自我を忘れた。そんな事どっちでもいい。今はこの状況をどうにかすることだけを考える。しかし、どうしたものか……。このままじゃ、2人ともお陀仏だ。淡路島に来て1日……。いや半日……。いや、数時間間でこんな状況に立たされるとは、今の日本は全く予想できない。

グギャアアアアア

竜の凄まじい咆哮が彼らの耳を貫く。鋭い目が睨みつけてくる。威圧に押されて言葉も出ない。しかし、時としている訳にはいかない。逃げないと間違いなく……。考えるだけで恐ろしい。その時、チャンスがおとずれた。竜は急に上空へと舞い上がった。その瞬間、和人と松山は背を向け、走り出した。住宅街から、国道へと出た。国道に沿って走り続ける。しかし、安心はまだできない。見たら、竜が上空から追いかけてくる。完全に標的にされていた。このままじゃ、状況は変わらない。寧ろ最悪の事態を引き起こしかねない。走りながら竜の方を見た和人は焦りに焦った。口に何かを溜めている。赤い光が見える。これは間違いがない。ブレスを放ってくる。そう思った時には、口から火の玉が放たれていた。

「松山！身を屈めろ！」

「お、おう!!！」

和人と松山は咄嗟にその場に身を屈めた。火の玉は彼らを掠めながら前方へと落ちた。目の前の道が完全になくなり、クレーターの様になっていた。これじゃ逃げられない。極限まで追い詰められた。人生ここまでか……。長かったようでも短かった……。やり残したこともあるのに……。そう思っていたらあの世行きはすぐになくなった。竜に向かって竜が突っ込んでいく。見た限りで分かる事。あれは自衛隊だ。隊員と思われる竜達は岩石竜に立ち向かっていく手にはアサルトライフルの様な銃を構えている。竜が銃を持ちますか。この世界では竜は何でもありか……。それはそれで恐ろしい。なんて言っている場合じゃない。自衛隊が足止めをしている間に、和人と松山は別ルートからに逃げを謀った。なんとか逃げ切ったようである。竜も襲ってこない。まだ自衛隊が足止めしているのかなと思うと、何か申し訳ないような気がしてならなかった。無力な自分達を助けてくれた事、感謝します。空に向かってそう思った。

和人と松山は避難用のバスに乗り、淡路島を離れ、兵庫県へと向かった。明石海峡大橋の淡路島側の入り口は完全に封鎖されている。看板には現在通行止めという文字。どうやら、既に淡路島は完全に侵入ができない状態。橋の上からはあの竜は確認できないが、今も何処かで暴れているのかもしれない。淡路島、どうなっちゃうのだろうか……。しかし、それより心配なのが松山の今後の事だ。話によると、父と母は既に他界しているという事、親戚の居場所も分からず、行く場所がない。そこで和人が出した案。

「行く場所がないなら、自分の家に来たらどうだ？どうせ1人暮らしだから」

「いいのか？迷惑にならないか？」

「何言っているんだ！？今は人間同士、助け合わないといけないだろ？」

和人は笑いながら桧山の肩に手をまわした。桧山は少し考え結論を出した。

「じゃあ、お世話になる。よろしくお願いします」

「その言葉待っていました。こちらこそよろしく」

とりあえず、行き場所は決まった。和人の家だ。しかし、ここから和人の家まではかなりの距離だ。新幹線に乗るお金はギリギリないと言ったところだ。時間はかかるが、その分お金が浮く在来線を利用する事にした。そのルートだったら、2人分は余裕で持っていた。和人達はバスを降りると、舞子駅へと向かう。行先は福岡県、北九州市に位置する駅、西小倉駅。そこまでは在来線で15時間かかる。長い道のりと時間だが、嫌な顔は何一つしない。なぜって？電車の内部が完全に貸し切り状態だったから。竜一匹乗っていなかった。好きな場所に座り寛いでいた。しばらくすると、辺りは暗くなっていく。山口県に入った時には既に真つ暗な状態だった。この調子で行くと、西小倉駅には11時前後で着くだろう。和人はしばらく外を眺めていたが、関門海峡に入った途端眠りについた。桧山も睡魔に負け、その場で熟睡。それから何時間経っただろうか。気が付き目を覚ました。眠たいながらもある事に気付く。電車が止まっている。やばい！寝過ごしたか！？と思っていたけど、電車が止まっている駅は小倉駅だった。和人はホツとし、桧山を起こした。次の駅、西小倉駅に着いた電車。和人と桧山はホームに降り立った。家は西小倉駅周辺。すぐに着いた。家からは鹿児島本線が見える。しかし、電車はあまり走らない。それもそのはず。終電である、23時50

分を既に過ぎている。通るとしたらせいぜい、貨物列車ぐらいだろう。桧山はぐったりとしていた。そうとうお疲れの様。リビングで眠ってしまった。和人は微笑を浮かべ、毛布をそっとかけた。まるで弟の様だ。和人はしばらく外を眺めていた。新幹線の線路の柱となる場所をずっと見ていた。しばらくして、鹿児島本線を長い貨物列車が通過していく。暇なので何両繋がっているのか数えた。その結果、18両は繋がっていた。結構な距離になる。とここで、ふと時計に目をやる和人。時計の針は1時を指していた。さすがに眠くなった和人。自分の部屋に戻り、ベッドに横になった。疲れをとるため、眠りについた。

## 第6章 福岡県封鎖

次の日のニュースはあの淡路島の事で埋め尽くされていた。でも、変な言い回しになっている……。  
その一部始終。

“昨日未明、兵庫県淡路島にて、巨大な岩石竜が人間2名を襲っているという通報を受け、警察、自衛隊が出動した模様です。岩石竜はその後、勢力を保ったまま、太平洋へとぬけていった模様です”

台風扱いかよ！？何でそこで勢力を保ったままとか、ぬけて行ったとかいうんだよ？そこは町を破壊したとか、太平洋へと姿を消していったとかでいいじゃないか！まあ、そんな事に突っ込んでもしようがない。状況が一変する訳でもない。今も何処かで身を潜めているだろう。あの岩石竜は一体なんだろうな……。元人間としか言いようがないが……。そんな事を考えると頭が痛くなる。また寝ようとしたら電話がかかってきた。誰からと思つて受話器をとつてみたら、相手は長谷川雄大だった。

「おお、長谷川か。どうしたんだ？こんな朝早くに……」

「村田……。桐原の事は聞いたのか？」

「桐原？何かあつたのか？」

「たった今、連絡があつてな……。あいつも……。竜になつちまつたらしい……」

その言葉を聞いたとたんに和人の動作が止まった。まるで石になつ

たかのように。桐原が竜になってしまったのか!? 嘘だと信じたいが、長谷川は嘘なんて付かない。一気に気が重くなった。仲が良かっただけになおさら落ち込んだ。でも落ち込んでいる場じゃないと感じた和人。

「長谷川、自分の家に来れるか? ちょっと話し合いたい」

「ああ、分かった。今すぐ行くから」

そういうと、長谷川は電話を切った。和人は受話器を置くと、部屋を出て、1階のリビングに向かった。そこで寝ていた桧山は既に目を覚ましていた。

「おはよう。村田」

「ああ、おはよう」

「どうした? 何か慌てているけど」

「今から、ミーティングをする。自分の友達を含めてだ。桧山も人間だから参加してほしい」

「別にかまわないけど……」

和人は急いで着替えた。着替えた直後に玄関のチャイム音が響いた。急いで玄関に向かい、鍵をはずして扉を開けた。そこには長谷川が息を切らしていた。走ってきたみたいだった。和人は長谷川をリビングに連れて行った。その後、初対面の長谷川と桧山は互いに自己紹介をした。そして、ミーティングを始めた。まずはあの事の再確認。

「なあ……桐原は本当に竜になっちまったのか？」

「ああ、朝、桐原から連絡があつた。電話に出たときには既に涙声になつていた。そして、俺に竜になつてしまったと言つた後、すぐに電話を切つた」

「そうか……これで、また人間が少なくなつてしまつたな……」

「どうしたんだ？村田、まだ疲れているのか？顔に今の状態が出ているぞ？」

和人は昨日あつた事を長谷川に話した。桧山との出会いからあの岩石竜の事まで。長谷川はそれを聞いて吃驚していた。実は長谷川も早朝のニュースでその事を知っていたからだ。でもその2名が和人と桧山だつた事は予想外のことだつたらしい。

「その、岩石竜？そいつは何か言つていたのか？」

「いや、何も言っていない。無口のまま、自分達を襲つてきた。気が狂つていたのかもしれない」

「そうか……」

「でも、なんか……」

「「？」」

桧山は突然口を開いた。そしてそこから出てきた言葉は予想をはる

かに超えたものだった。

「あの岩石竜……元人間的な感じはしなかったけど……」

「いや……あれが人間じゃなかったら……ただの竜ってな  
ってしまっけど……」

「そうだよ。気のせいだよ……」

和人はその言葉に突っ掛かった。人間じゃない……。何か裏にあるのだろうか？いや、それは考えすぎだろ……。あつたらおかしい……。日本が崩壊してしまうかもしれない。それだけはない！強引に自分を納得させた。しばらく話をしていたら電話がかかってきた。和人は急いで電話に出る。警察からでした。和人は何かをやらかしたのではないかと思っただらそうではなかった。

「こちら福岡県警です。たった今、福岡県全域に避難勧告が発令されました。理由は全く分かっていませんが福岡県はこの後、完全に封鎖されてしまいます。午後7時までには福岡県外に移動してください」

ブツン

理由はよく分からないが避難勧告が出された。和人は桧山と村田にこの事を話した。しかし2人とも戸惑う事はなかった。これからどうするべきかを話し合いだした。

「よし、考えが纏まった」

「何処の県に行く気だ？」

「何処の県？そんな事はしない。俺らで理由を突きとめてやるっじやないか！」

意外な言葉に硬直してしまった。理由を突き止める？マジで言っているのか？それは警察を無視することになるぞ？ましてや今の県警も竜だぞ？

「このままじゃ、日本がおかしくなってしまうからな……。誰かが動かなきゃ何も発展しないだろ？」

「俺も賛成。故郷の淡路島もなくなってしまうかもしれない……。そんなの絶対に嫌だ！」

和人はその言葉を聞いて迷う事はなかった。みんなの力を合わせれば不可能だって可能になるかもしれない。確率は極めて低いがやってみる価値はある。

「分かった。その傾向で行こう。でも今は行動を起こすと気付かれる可能性がある。ここは午後7時まで家の中で待機していた方がいいと思う」

「村田の意見に賛成」

和人達はこのまま、家の中で待機する事にした。気付かれないように窓はカーテンで覆い、すべての鍵を閉めた。そして、2階の自部屋にて、夜を待つ事にした。和人は時々、カーテンを少し開け、窓越しに外を見た。竜達が一斉に逃げ出している。みんな、避難勧告を受けて移動しているみたいだ。その数、ざっと6000匹以上。空が竜に覆われている。こんな光景初めて、ってか初めてじゃない

とおかしいけど。和人達は今後の計画などを話し合いながら時間が経つのを待った。しばらくは何もなかったが、突然玄関の扉が開く音がした。

「警察だ。ここはもう誰もいないのか!？」

(うわ!!まずい!隠れる!!!)

警察が見回ってきたらしく。家の中に入ってきた。警察の1匹が階段を上ってくる。和人達は急いで隠れた。警官は物音を感じ取ったのか。和人の部屋に入ってくる。しかし、そこに人影はなかった。警官はベッドの下や押し入れなどを調べた。しかし、何処にも誰もいなかった。警官たちは10分後家を出た。

「あのさ・・・早くどいてくれ・・・重いんだよ・・・」

押し入れを開け、3人が出てきた。和人は何故か腰をおさえていた。何故かという現状を説明しよう。和人達は押し入れの布団の下にある隠し扉の中に入っていた。しかし、入れるスペースが2人分だったため完全に押し込み状態になっていた。一番下になっていた和人は2人の体重がかかってしまい、結果腰を痛めてしまった。

「お前ら・・・もうちょっと考えてくれよ・・・」

「急いでいたものだから・・・でもまあ、気付かれなかったからいいじゃないか」

「・・・」

その後、和人達は準備を済ませた。その事には太陽が既に沈んでいて辺りは暗くなっていく。勿論何処の家も明かりは付いていない。完全に自分達だけとなってしまうた。和人達も怪しまれないように明かりを消して、懐中電灯だけでその場をしのぐ。そして、午後7時を回った。それと同時に行動に出た。和人達は荷物の再点検をし、ゆっくりと玄関の扉を開けた。これから、この福岡県が封鎖された。理由を突きとめる。あてはない。だが、迷っている暇はない。福岡県は危機に立たされているのかもしれない。それを考えたら、立ち止まっている訳にはいかない。和人達はゆっくりと歩み始めた。

## 第7章 関門海峡から響く咆哮

閑静な住宅街の中、3人は周りに警戒しながら道を進んでいく。今となつては自分達だけとなつた小倉周辺。何もかもがなくなり、希望の光が閉ざされたかのような空気だった。その空気をいつどこで感じた事があるかつて？知らないよ。自分じゃなくて松山が感じていた事。松山は何かしらよく分からないオーラを放っている。どうも気になるが今はそんな事を気にしている暇なんて1秒もない。今はなぜこの福岡県が封鎖されてしまうのかその原因を突き止めるのが先だ。しかし、一番重要な事を忘れていた。

「村田……あてはあるのか？」

「ない！」

あつけない一言でその場を凌ぐ和人。誰もが考える事。先を考えずに突っ込んでいくパターン。その言葉に2人は和人に冷たい視線を送った。それに気付く和人。ん？自分が何かした？とにかくあてを考えないのが自分だ。そんな事を考えていたら時間がなくなるだけだ！それだつたら行動しながら考えた方が効率がいいはずだ。しかし、歩いていると考えはまとまらない。結局はその場に立ち止まって頭の中を整理する事になる。

「さて、あてを探すか」

「今頃かい！！！」

「村田……大丈夫？」

「何のそのだ！！！多分……」

やっぱり。ここで断言できるはずがない。そんな無意味な会話は数分続く。しばらくすると上空から翼が羽ばたく音が聞こえてきた。和人は急いで近所の家の中庭に身を隠した。身を隠した家の前の道をさらに県警と思われる竜が2匹走っていた。飛べないのかよ……。それとも高所恐怖症か？どっちにしる走る事に関してその翼は邪魔だろう……。無意味な背中に生える翼。まあそんなことどうでもいい。その県警竜達に耳を傾けてみるとどうやら早口で会話をしているようだ。和人はその会話の一部始終を聞きとった。

「本当なのか！？」

「間違いない！巨大な水竜は関門海峡に現れたそうだ！！」

関門海峡。それは福岡県の門司、山口県の下関の間にある海峡。その海峡をまたぐ関門橋は福岡と山口をつなぐ道である。これとは別に関門トンネルというものもある。話によるとそこで巨大な竜が確認されたという事だった。という訳で行くあてが決まった。

「これはもう関門海峡に決定だ！！」

「原因は最初から分かっていたのかな？でもそれだったらあんなに慌てないよね……」

「これはさっき見つかったとみてもいいんじゃないのか？長谷川はどう思うか？」

「さあ、そこまでは分からない。でも関門海峡で見つかったんだろ？じゃあさっさとそこに行った方がいいんじゃないのか？俺達が

力になれるかどうかは微妙だが」

確かに力になれるかどうかは微妙・・・てか殆どって言っていないほど力にならない。無力に近かった。でも自分たちにはできる事もあるかもしれない。それだったら行った方がいいんじゃないかと思う。確定、直行で関門海峡へLet's Go!!!

関門海峡周辺。ここは門司港駅。とりあえず門司のシンボリックな場所にきてみた。着いてすぐには何も感じなかったが徐々に変な空気を感取り始めた。そして、地面が揺れる。これは・・・地震か！？いや、違う。地震じゃない。地震だったら、初期微動のあとに主要動が来るはずだ。しかし、何故か初期微動。揺れ停止。初期微動揺れ停止。の連続だ。まるで巨大な生き物の足音の様だ。ん？足音？まさかこれが・・・。和人は急に海の方へと走りだした。それを追いかける長谷川と松山。和人は防波堤から関門橋の方を見た。そこにはまともじゃない光景が広がっていた。海面から関門橋までが約141m。その約3分の1の大きさ。体長は約40メートルはある。それが関門海峡を縦断していた。その行く手を阻むかのように、目の前には数十匹の自衛隊の竜がいた。必死に攻撃しているようだったが、巨大な竜は微動だにしない。それをマジマジと見てしまう。しばらく移動していたかと思うと急にその巨大な竜は立ち止った。立ち止まった場所は関門橋のすぐ手前。すると巨大な竜は体をひねり始めた。そして海面から細く・・・嫌自分達から見れば太い尻尾が姿を現した。そしてとった行動。その光景に目を覆いたくなった。尻尾はまっすぐ関門橋へ。そして関門橋に直撃。真つ二つに折れた橋はそのまま関門海峡へと落ちて行く。残骸はゆっくりと沈んでいった。まさか、あの関門橋が破壊されるなんて・・・考えもしなかった。この人生の中で壊れる事はまずないと思っていたのに・・・それが目の前で起きた。しばらく茫然とする3人・・・

・ってこんなところで茫然としている場合じゃないっ！！！！和人は関門橋の方へと走りだす。それに気付かない2人はまだ茫然としている。和人はとうとうと何も考えずただ突っ走っていた。気付いた時には巨大竜の横にまできていた。そこには県警竜が数匹いた。すぐ和人に気付いた。

「き、君！？まだ逃げていなかったのか！？まだ竜にもなっていないではないか！！！」

「んなこと言っている場合か！！今は福岡県に危機が迫っているんだろっが！！！」

「しかし、どうするんだ！？こいつの動きは未だに止まらない！！！」

「じゃあ、どうにかする。やらないと奇跡は起こらない！」

そういうと、和人は傍にあった陸上競技で使うやり投げ用の槍を手にとった。なぜそんな場所に放置されていたのかよく分からないがそんな事は考えもしなかったらしい。和人は目標に合わせると渾身の力を込めて投げつけた。槍は巨大竜の顔に一直線。そして目に直撃した。その瞬間傍は巨大竜の悲鳴だけが響いた。その悲鳴は途轍もなく大きく鼓膜が破けそうだった。和人や県警竜がひるんでいるうちに巨大はこちらを向いていた。そして、口から水を噴射させてきた。

県警竜はその攻撃を受けてしまうが、和人は違った。持ち前の身体能力を活かし、傍のビルの壁を走りながら登り、飛び出ている看板に飛びつく。そして一瞬で看板の上に乗った。下から襲ってくる水鉄砲をかわした。飛び降りた先にあった鉄棒のような場所を掴み一回転してそのまま地面に着地。決まったとばかりに声を上げる和人。

しかし、まだ巨大竜は襲って来る。大きな腕を振りかざし、鋭く尖ったかぎ爪の付いた手を思いつき振り降ろしてきた。和人はその攻撃をなんなく避けたが、攻撃された場所は完全になくなっていた。海水が開いた穴を埋め尽くした。また海の領域が増えた。

んな事言っている場合じゃねえ!!!今はこの巨大竜をどうにかするかだ!!!と思っていた矢先のことだった。竜が突然、咆哮。

その咆哮は風圧だけでなく威圧感も凄まじかった。その勢いなのか、関門海峡から巨大な波が押し寄せてきた。県警竜は飛んで回避する事ができたが、和人はそうにはいかなかった。これはどう考えても避けられないと思い、背を向け、陸の方向へと走っていく。しかし、水の勢いは和人を今にも飲み込みそうな感じだった。逃げに逃げるがここで足が攣る。ぐわああああ!!!何でこんな時に!!!  
!その場で悶える。結果、波に飲み込まれてしまった。水が引いた時には和人はその場にはいなかった。波にのまれてしまったようだ。長谷川と松山も例外ではない。和人同様波にさらわれそのまま行方不明。今は何処にいるか分からない。そもそも生きているかも分からない。そんな光景を見ていた巨大竜は人声上げると、関門海峡の中へと消えて行った。ここで一つ気付いたのであるか?自衛隊が何故か攻撃の手を緩めた。終いには攻撃をしなくなった。皆しばらく俯いたままになっていたが、その後何があったかのように暴れ始めてしまった。崩れた関門橋の上で……。

## 第8章 IN鳥取県 待っていたものは……

流されてどれぐらい時間がたったんだろうか？意識が朦朧……。まだ体を起こすのは早い？ってんな事言っている場合じゃないっ！自分には流されてどうなったんだよ！！急に意識を取り戻し身体を起こす和人。まずは状況確認。辺りを見渡す。砂浜っ！！そりゃそうか……。岩壁はさすがに流れつく場所ではなさそうだし……。で、ここは福岡の砂浜ですか？いや、福岡じゃない。何処だと考える事もない。何故って？目の前に広がるのは砂浜。そう、砂丘という名の砂浜。ここは鳥取砂丘。つまり鳥取県だ！福岡の関門海峡からこんな所まで流されてしまったのか！生きているのが不思議だっ！！そんな事言っている場合じゃない。長谷川と桧山も波にのまれたはず……。今どこに？考えていてもしょうがない。歩こう。鳥取砂丘をぬけよう。

3時間後。ようやく商店街……。だと思われる場所に到達。商店街……。なのか？全ての店がシャッターで閉ざされている。商店街の外も静寂に包まれている。聞こえるのは町を吹き抜ける風の音だけだ。自分1人だけになったのか？いや、それはないだろう。一瞬で自分だけになる事はまずない。でも、鳥取県はどうしてこんなにも静けさが漂っているんだ？と思った時だった。突然静寂を破るかのようにサイレン音が鳴り響く。突然の巨大な音に吃驚し耳をおさえながら、倒れ込む。すぐに立ち上がってサイレンのする方を見た。その方向からは竜の大群。よかった、普通にいるんじゃないか。ホツと肩を撫で下ろしたが、それもつかの間。1匹の竜が和人に目掛けてブレスを放ってくる。和人は戸惑いながらも身をかわした。

すぐに竜の方に目をやる。とんでもない光景だ。他の竜もブレスの準備。

「のうわああああ!!!!」

和人は飛び起き、走る。国道と思われる道を走る! 勿論全速力だ! これはどういう事が走りながら考える。

.....

だあああ!!!! 走りながら考えられるか!!!! 自分の行動に逆切れ。勿論逆切れしている場合ではない。気を落ち着かせる。とりあえず、この状況・・・どうしたものか!? 逃げていても埒が明かない! とりあえず、言葉で質問。走りながら。

「お前ら!!!! なぜ自分を襲ってくるんだ!? 何かしたのか!? 鳥取に何かしたのか!!!!」

「ニンゲンヲタオス・・・コロス」

だあ! こいつら何言っているんだ!!!! でも、状況が把握できた! こいつらは自分を殺そうとしている! そうなると話して解決する値ではない! これは予想だが、人間はドラゴンウィルスに完全に支配されてしまったのか!? そうなると意識まで竜化するのか!? 恐ろし過ぎる!!!! てか、自分を襲うな!!!! 普通ならここで誰かが助けに来るが、これは漫画じゃないっ! どうしたものか!!!! とここで奇跡舞い降りる。突然上空に現れた影が和人の身体を持ち上げた。和人は吃驚し、自分を掴んだ者を見た。それは襲ってきた奴ら同様、竜。でも何か違う・・・。何というか・・・こっちの方が竜らしい・・・。と竜が口を開いた。

「大丈夫か？さすがに人間があんな数の竜を相手にしたらたまったもんじゃないよな」

態度でかいな……。でもそんな事を言っている場合じゃない。見ると後ろから竜が襲ってくる。和人を掴んだ竜は襲ってくる裕の方を見ると、口に何かを溜め始めた。そして……。

「ゴッドブレス!!!」

竜の口から巨大で輝く炎を放った。その炎は竜達を一撃で倒した。力をなくした竜達が地面へと落ちて行く。それを確認した竜は和人を連れて違う場所へと向かった。和人は急に掴まれたにも関わらず冷静だった。この竜は自分を襲ってこない。という事はまだ完全に支配されていないのかな？ってこれは自分の推測だった。正しいかどうかも分からない……。考えをまとめる前に雑木林の中に降り立った。和人はその竜にいろいろと質問したいような表情を出していた。それに気付いた竜が微笑を浮かべながら話しかけてきた。

「その顔、僕にいろいろと聞きたいようだね」

「その通り、色々聞きたい事がある。まず基本的な質問。お前は誰だ？」

「やっぱりその質問が最初ですか」

しばらく黙りこむ竜。質問の答えを静かに待つ和人。2分後、ようやく答えが纏まったのか口を開いた。

「普通だったら誰にも言わないけど、君には特別に教えてあげる。」

僕の名前はエクセレント。多分君の事だから信じてはくれないと思うけど……この空間ホールと言うところを通って竜界から来たんだ。で、僕はその竜界の5大竜王の1匹なんだ。因みに種類は火・水・地・天・闇で僕は天の竜王だよ」

「……………」

「やっぱり理解できない？」

いや、理解はできた。竜王なんだろう？で、竜界？本当に信じがたい事だ……。でも今は非現実的な事は何でも現実でありそうな感じだ。半信半疑だったが、半分信じていると伝える。意外な反応にちよつと焦っていた。その時の顔……。好きだ。で次の質問。

「竜界からわざわざ日本にどんな御用で？」

「それが今回の目的なんだ。今この人間界で竜になつちゃう事件が発生しているでしょ？どうしてそんな事が起きてしまったのか調査しているんだ。全く分かっていないけどねw」

笑うなよ……。こっちは感染していないのが仇となって襲われているんだ……………」

「ところで、何で襲われていたの？何かやらかしたの？」

「んな訳ねえだろうが！そんな事、自分は絶対にしないし！！……てこんな状況でやらかすってどんだけ場を読めていないんだよ！」

「やっぱり……………そこもよく分からないんだよね……………」

「どづいつ事だ？」

「竜化するウィルスは知っていたけど、意識まで竜化する例は今までなかったんだ……今回のウィルスは途轍もなく強いつてことになっちゃうね」

うわぁ……ドラゴン・ウィルス……恐ろしい。これじゃあドラゴン・ウィルス強。そんな名前じゃないか……。

「ドラゴン・ウィルスExとでも言っておこうかな？」

勝手に決めるなよ……それくらいの感染力と支配力はあるかもしれないけど……。それはちょっとどうかな……極端すぎないか？まあ、どうでもいい……。あっそうだ。ウィルスについて聞きたい事があった。

「このウィルスは治るのか？仮に治ったらどうなるんだ？」

「こつちでは治らないって言っているみたいだけど。こつちの特別な秘薬を使えば治るよ。勿論その時は人間に戻るよ」

「この状況だと……秘薬はないんだろうな……」

「作り方も分からないんだよね……あれは古代のウィルスと薬だからね」

……。

「まだ僕の事信じられない？」

「いやいやいやいや。何処を基準に信じる信じないの値が増えたり減ったりするんだよ!!!ただ単にウィルスの説明していただけじゃん!」

「酷いな。僕は君を助けたんだよ?」

そこでそれを持ってくるか……。こうなると言い返す言葉が出ない。言い返す力もないけどね……。正直昨日の事から疲れが溜まりに溜まっているからな……。

「じゃあ、聞くより実際に見た方が信じる度上がるかな?」

そりゃあそうだろ……。目の前に広がる事は限りなく真実に近い。もし竜界があるのであれば実際に見てみたいものだ。まあ、竜しかないのだろうけど……。ここも人間界というより竜界に近いけど……。

「それじゃあ、特別サービスだよ?」

そういうと、エクセレントは目の前の空間を歪めた。そして入り口なようなものが現れた。何でもありだな……。この世界は……。そう思った和入。

「行くよ?準備はいいかい?」

「準備なんていらなない。いっつも真向勝負!」

「人間って無鉄砲だね。じゃあ行くよ!!!」

そういうと和入の腕を掴んで、入り口に突っ込んだ。空間なんだか

ら時間がかかるんだろうなって思っていたけど、すぐに出口。早っ  
！！！僅か3秒！！直行だよ！それで、着いた先。目の前に広がっ  
ていた光景。竜が楽しそうに会話をしている。町のと真ん中で。子  
供竜かな？ベーゴマの様なもので遊んでいる。

「ねえ？僕の言った通りだよ」

これで半信半疑は確信に変わった。竜界は実在した。そしてエクセ  
レントの言う事は信憑に足すものである事もまた確信した。

## 第9章 竜界の火竜王！驚愕の真実

竜界……本当にあったのか。でもドラゴン・ウィルスが蔓延して1週間もしないうちに竜界に来てしまうなんて予想外。てか誰が予想するか？横にいるエクセレントという自称5大竜王の1匹に会ってここに来た訳だが……ここに来る理由を考えてなかった。簡単に言おう来た意味がない。今の状態だったら何も進展しない。町から離れた林に身を隠しながらそう思っていた。因みに5大竜王の姿は分からない為、他の竜から見れば普通の竜だとか……でもこれ、普通の竜じゃないだろ……。翼には装飾をあしらっていて角付近にはフェザーネックレスの様なものを付けている。明らかに違うだろ。そう突っ込んでやりたかったが、やめた。やるだけ無駄だ。ここである事に気付く。

福岡県と兵庫県で確認されたあの巨大な竜。エクセレントは知っているのんじゃないのか？迷うことなく質問してみた。

「エクセレント……お前は知っているのか？日本に現れた巨大竜の事」

「うん、知っている。水竜と岩石竜の事でしょ？あれは人間界の5大竜王の地の竜王と水の竜だよ？」

予想を遥かに超えた答え。何？人間界の5大竜王？もう訳が分からん……。何で人間界に竜王がいるんだよ……。完全に人間は支配下にいるってことじゃねえか。ん？でも竜王がいるならなぜ今まで姿を現さなかったんだ？2000年間は竜が現れたなんて事例はないし、日本史にも世界史にも載っていない……。なんでだろう……。

「竜王は地球ができたときからいたってことになるよな？じゃあ今まで姿を現さなかった理由があるの？」

「今の今まで竜王たちは地下深くに封印されていた筈なんだ。それが今回復活を果たしたという事になるんだ・・・理由は分からない・・・でも今の竜王は力を出し切れていないから日本がなくなる事はまずないよ。でも一体誰が復活させたんだろう・・・。自分の力で復活できる訳がないから・・・」

謎は深まるばかりだ。復活の傾向は未だ突き止める事が出来ない。小さな手掛かりがあればいいがそれすらない。誰かが復活させたとなれば・・・そいつがウィルスを撒いたとしか考えられない・・・まあこれで分かった事もある。竜王は5匹。今復活が確認できたのが2匹。残り3匹は何処かに眠っているのか？それが復活すれば必ずって言うていいほど地球がやばくなる。阻止するにはその復活させようとする奴を突き留めないといけないけど・・・さっきも言ったように手掛かりがない・・・どうしよう・・・

「こんな所でじっと考えていてもしょうがないでしょ？とりあえず町に行ってみようか？」

「正気か！？襲われたらたまったもんじゃない！！！」

「じゃあどうするの？」

「行ってこーい！！！！自分はこちらで待機！！！！！」

「そついつと思ったよ」

正直ここは行かせる事が無難。行って襲われてお陀仏になったらど

うするんだよ。ここではい終わりって絶対いやだぞ!?!?.....  
ういえば.....長谷川と桧山.....あいつら生きているのか  
?いや、死ぬ訳がない.....。うん。そう信じている。.....  
それにしても遅い.....。

## 1時間後

「戻ってきた.....つて寝ちゃってるね」

いつの間にか寝入っていた。木に凭れてコクコクなっている。エク  
セレントは何を思ったのか和人の右頬を思いつき引つ叩いた。勿  
論、痛くない訳がない。言葉にならない痛みが全身を伝わって、脳  
を刺激。飛び起きる。そして、悶える。しばらく俯いていた。痛み  
が少し引いたところで.....。

「おまつ.....お前!!!!顔が!顔がつ!?!あぎや!!!!」

「軽くだたいただけなのに.....」

「竜の力+人間の皮膚の抵抗力+握力のかかり方1ぺんに考えたら  
分かる事だろ!!!!!!つてこの数式はどういう事が分からん!」

自分でもよく分からない事を発してしまった。エクセレントの頭  
上にもクエスチョンマークが3つほど。いつものあれだ。暴走つて  
やつだ。まあ、狂ったつていった方がいいかもしれないけど.....  
で、情報収集はどうなつたんだ?

「そういえば、さっきの情報集なんだけど。引つ掛かる事があるん

だ

「引つ掛かる事？」

「最近、人間を見かけるようになったんだって。捕まえる事は出来なかったけど、確かに人間だったって」

人間が目撃されているのか？なんで？空間ホールを通らないと来れないんだろ？何で？まあ、そんなことどうでもいい。あつどうでもよくない。もしかしたらその人間が長谷川と松山なのかもしれない。よし決定。誰が何と言おうと決定事項！

「よし、人間捜そう！もしかしたら長谷川と松山なのかもしれない」

「長谷川？松山？君の友達？」

「まあ、そうだな。簡単にいったら」

よしっ！と言う訳だから今から人間捜索実行。という訳で有力な場所。近くの森へ。

5時間とちよいちよい。手掛かり1。足跡が発見されたがそれ以外は何も分からない。こんな事じゃ日が暮れる。急がないといけないな……。でもどう捜しらいいだろうか……。そう思って辺りを見渡した。とここである事に気付く。エクセレントがない。何処行った？もしかしてはぐれた？やばっ。暗くなったらさらに捜しにくくなる……。そしたらもつとややこしくなる……。と思った時だった。新たな足跡を見つけた。これは……。靴の足跡。そして傍にあるのは……。竜の足跡？もしかして襲われていたのか

？それを辿っていくと川が現れた。流れが急う！足跡はここで消えていた。考えられるのは……ここで捕まった……。いやそれだっただらもつと足跡が付いているはずだ。揉めると足跡はかなり付くからな……。でもそんな跡はない。という事は……。誤って転落。流されたってことになるな……。それだっただらまずいな……。

和人は流れて行く方向へと走っていく。どんどん下っていく激流を追いかける。時頼、川の方を確認。もしかしたら流されているかもしれない。でもそんな影は見えない。茶色に濁った川がどんどん流れて行く。しばらく行くと道と川が途絶えた。でも完全に途絶えたって訳ではない。

「うわっ……。滝かよ……。！！？あゝ！！？」

滝の傍に誰かが打ち上げられていた。人間の女性……。？？？よく分からないけど、助けないと！和人は滝の淵へと飛び込んだ。そして打ち上げられた人間の傍までいった。とりあえず、女性を陸に上げた。驚愕1。竜になりかけている！？だああ！！！！また訳のわからない事に……。とここでエクセレントが和人を見つけた。傍に駆け寄ってきた。その時には既に人間の面影が……。会って早々これか……。会ったに値しないけどね……。と倒れた人間？竜？どっちでもいい！横たわった者を見て驚いていた。

「あつ……。火の竜王……」

「ん〜火の竜王……。はあ！？」

驚愕2。これが火の竜王！？どつちかっついていたら竜の女王……。なんて言っている場合じゃない！！なんで？何で？どういう事だよ！？だって人間だったんだぞ！？それに竜王はもういるんじゃない

のか!?

「話していなかったけど……僕以外の竜王は行方が分からない  
くなっていたんだ……。それがこんな所で倒れているなんて……」

「あのさ……水を差すような事言っただけ……こいつ今さっきまで人間だったんだけど」

「!!!? 本当? えっ!?! 火の竜王は人間じゃないよ!?!」

「ん〜そこは分からないね……。気が付いて竜王の口調だったら  
竜王かもしれないけど女性の口調だったらややこしくなるよね……」

「……ん〜」

気が付いたようだ。ゆっくりと体を起こして……。動作が止まった。自分の手を見て硬直している。これは……。あれですか?

「えええええええ!?! わ、私の手が!?!」

「はい、人間ですね。思考の方は……」

人間でした。火の竜王は人間なのですか? それともややこしくなるけど……。何らかの事件で人間になって記憶を失ったとか……。それも考えられるけどな……。

「どうして? どうして人間の?」

「そこは分からないな。人の頭の中は見ることが不可能だからな」

「?ひゃ!?誰?に、人間でしたか……」

「どうしたの?君は誰?」

「私は……火炎ひえんまい麻衣です……。私……。どうしちゃったの?」

戸惑っている。無理もないよね。普通の人の思考だったら竜になった途端パニックを起こすよね。でも真実は伝えないと。

「火炎……。だったね。今の姿は竜界の火の竜王……。だって」

「火の……。竜王?何で竜王のですか?どうしてですか?」

「んゝそこまでは分からないな。自分はその竜王の1匹、エクセレントから聞いた事だから。まあエクセレントは襲わないから大丈夫」

「火炎……。か……。何か変な記憶とかない?」

「記憶……。ですか……。あります。私の記憶じゃないものが……。あるみたいなのです」

絶句。これはただ事じゃない。考えられる事は2つ。1つは竜王の記憶が戻ってきている。もう1つは竜王の記憶に支配されかけている。どっちかだ。でも現時点で分かる訳がない。まあ、いいや。竜界にはエクセレントがいれば来れるだろう。とりあえず戻らないといけない。日本の方も気になるし。

「エクセレント。自分と火炎を一旦戻してくれないか？」

「分かった」

エクセレントは空間ホールを作りだした。和人と火炎はその穴に飛び込み日本へと戻った。そして出た場所はこつちに来た場所とは異なっていた。ここは・・・標識に書いていた。新潟県の十日町だ。十日町はいつも通り。店は営業し、子供竜が遊んでいる。おばあちやんと思われる竜が立ち話している。長閑な日常が流れていた。

## 第10章 VS 闇竜王！ ほくほく線の闘い

日本海に面する新潟県。夏でよかったと思う。冬だったら凍え死んでいるな、今頃。まあ、何と言いますか？新潟県十日町は平凡だ。普通に生活している。しつこい様だが竜が長閑に生活している。まあ、これが現実と受け止めるのにどれだけ時間がかかった事か……。学校で最初見たときは何が何だか分からなかったしな……。クラスの奴らも竜になっちゃうし……。どうしたものかな？まあ、そんな事今となつてはどうでもいい事。とりあえず、横にいる火炎麻衣っていう元・女性の人間、現・竜界の5大竜王の姿。竜女王に改善しろよ。なんて言ったところでそれが採用される訳ないか……。まあ、何というか……。体つきはオスに近いし……。まあなんとかなるだろ。オスに似つかわしくない声はいいとして……。まず何処にいたのか聞かないとな。

「火炎だったな。何処が故郷なんだ？」

「私は……。青森県の八戸市に住んでいます」

「八戸市？ああ……。青森県の右端つこにある市か……」

「はい……。でも最近……。何が原因か分からないのですが……。気付いたらあの場所いて……。気付いたらこの姿に……」

自分でもまだ状況を把握していないんだな……。という事は空間ホールは発生させるものではなく、勝手に発生するってことになるのか。エクセレントはそれを操る事ができるのか……。いや、竜王の奴らって言った方が正しいのかな？それだったら、自分の力だと気付かずに勝手に発生させてしまっただけに行っちゃったと

いう仮説ができる。まあ、そこははつきりしないけど……。

「さてどうするか……。先ず君を故郷まで送らないとね……」

「でも、あなたに迷惑が……」

「迷惑？そんな事はない！自分も今は行き場所がないから……  
。まあ、心配するなって人間だけと竜と対峙できる力はあるから……  
・多分」

やっぱり、きつぱりという事ができない。それもそうだけど。これを確信できる奴はどれだけ自分の力に自信があるんだよ。なんて言っていた矢先のことだった。前方から竜の大群。また襲われるのか！？と思っていたがそうではなかった。竜達は悲鳴を上げながら和人達を通過していった。何かから逃げているようだ。不思議に思った和人と火炎は竜達が逃げてきた方向を見た。でたっ！あれは風格からして竜王だっ！多分闇の竜王！黒に赤はそれっぽさを出している。なんて解説している場合じゃなかった！！逃げる！思いつきり逃げる！そして感じた事！竜王だからって大きい訳じゃないっ！火炎も大きさは普通の竜と変わらない。しかし、速さは桁違い。みるみる距離を縮められてしまう。とここで目の前に十字路。そこに到達した途端に、火炎を掴み、右へと身をかわした。闇竜王は曲がり切れずそのまま直進。それを確認するやいなや、起き上り再び走り出す。見失ったのか、辺りをキョロキョロしていた。ここで見失うなんて……。

しばらく走ると目の前に駅が現れた。十日町駅。ほくほく本線の駅の1つである。他のほくほく線の駅と比べたら大きい方である。……  
。ってか、ほとんどが無人駅である……。しばらくすると住宅地

の方から大きな音が響く。その方向を見ると家がどんどん倒壊していく。どうやら壊しながら進んでいるようだ。このままじゃ、見つかってしまう。和人達は急いで駅の内部へと入って行った。内部は駅員が1匹もいない。みんな空を飛んで逃げたようだ。ホームに上がってみると681系という形式の特急電車が止まっていた。勿論運転手はいない。ここで和人は1つの案を思いついた。

「これを使って逃げればいいんじゃないのか？」

「え？これをですか？運転できるのですか？」

「まあなんとかなるさ。速度の上げ方とブレーキの使い方ぐらいは知っているし、クラスの奴が言っていた。この特急、在来線の中で一番速いそうだ。だから行くぞ！」

和人は電車内部へと入った。しかし、問題は火炎の方だった。ドアが小さくて入れない。火炎は力づくで入ろうとした。結果、ドア周辺のボディを破壊。巨大な穴が開いた。まあ、入ってきたドアの場所が運転台の方ではなく、後ろの方でよかったと和人は思っていた。和人は運転台に入り、席に着いた。火炎は傍に立っていた。速度を上げると思われるマスコンを手間に倒す。すると、電車が動き始めた。電車はみるみる速度上げ、数十秒で最高時速160キロに到達した。そのまましばらく惰性運転をした。そして次の駅、まつだいを駅を通過した時だった。車体が大きく揺れた。運転台の横の窓が割れた。運転台から投げ出される和人。何かと思い、割れた窓から外を確認。するとあの閻魔王が攻撃していた。厄介だ。

「前!!!前!!!前!!!」

和人は何かと思って前を見た。和人に迫ってくるトンネルの入り口。

和人は慌てて首をひっこめた。間一髪。和人が首をひっこめた瞬間  
特急はトンネルへと突入した。和人は肩を撫で下ろすが今はそんな  
場合じゃない。

「火炎！運転頼む！！」

「ええ！？」

吃驚する火炎をしり目に、編成の一番後ろまで走った。嫌な予感が  
していた……。最後尾の運転台からトンネルの奥を見た。予感  
は的中した。閻魔王は追いかけてきていた。トンネルの壁にあたる  
たびに壁が崩れて行く。このままじゃ、この特急も襲われてしまう。  
ましてやこんなトンネルの中だと逃げ場がない！和人は3両手前に  
戻った。ここは編成の区切り点がある場所だ。和人は初めてながら  
も素早い手つきで連結を解除していく。そして、連結をはずした。  
はずした方の車両はどんどん離れ、閻魔王に直撃した。さすがに追  
っては来れなかったようだ。車内に戻り、座席に腰掛けた時だった。  
悲鳴が聞こえたのは。

「きゃああああ！！！！」

和人は火炎の声だとすぐに認識し、運転台に戻った。戻った時には  
火炎は何かに脅えるような表情を浮かべていた。何も言わず一点を  
さしていた。その先には……。停車している快速電車があつた。  
なぜか？まつだい駅と次の駅、ほくほく大島駅の間には儀明信  
号所という場所がある。ここほくほく本線は線路が1つしかない。  
その為、向こうから来る電車とぶつからない様にと2つにしている  
場所がある。それによって事故も起こらずに運転できるのである。  
しかし、今回、普通なら対比する場所じゃない場所に快速が止まっ  
ていた。どうしてかはすぐに分かった。傍に大きな穴があとにいる。

きつとこの事を聞きつけて電車を止め逃げたのであろう。しかしこのままじゃ事故が起こりかねない。考える暇はなかった。和人は火炎にドアの傍にある手すりを破壊してくれと頼んだ。火炎は竜の力ですぐに手すりをへし折った。身長ぐらいの鉄の棒を和人に渡した。そして和人は窓の外に顔を出した。壁にあたらないギリギリの場所だった。鉄の棒を構え、タイミングを待っていた。そして分岐点が傍に来た時だった。分岐点に鉄の棒を投げつけた。その反動で分岐点が進行方向を変えた。特急はスピードを維持したまま、曲がった。その瞬間、車体が大きく揺れた。本来、分岐点に入る時は時速を落とすのが普通である。しかしそのまま突っ込んだ為、車体が揺れたのである。その揺れは勿論車内にも影響を及ぼしていた。傾いた床で滑り、壁に頭を強打した。激痛が和人の頭を襲った。火炎も翼を何処かで打ち、攀ったと言っている。翼が攀るってどんなものだろう……。

しばらくするとトンネルを抜けた。その時、向こう側に閻魔王を確認。何を思ったのか割れた窓から車体の上に入った。閻魔王は和人に黒いブレスを放ってくる。和人は華麗に避ける。ドッジボールで投げてこられたボールを避けるかのように。閻魔王は、和人に近づいて、腕を振ってきた。避ける・避ける・避ける!!!とここである事に気付き、身体を思いつきり反らした。その瞬間トンネルに突入。閻魔王は頭を思いつきり強打し、線路の上に落ちた。和人は体を反らしたまま一息ついていた。しかしこの格好を維持するのは辛い……。どういう状況かだつて？説明が難しいから却下。その後、トンネルとトンネルの間で車内へと戻った。その後、ほくほく本線の終点地、犀潟駅で特急を止めて、ホームに降り立った。ここから先はどうしたものか……。目の前に広がっていたのは鉄道の残骸の山。鉄道同士でぶつかったと思われる。どうしてこんな状況になったのか……。その答えはすぐに分かった。ここの竜も

既に精神まで竜となっていた。完全に制御できる奴はいないのかよ。……四方八方竜で囲まれていた。もうだめか……。そう思った時、火炎が恐ろしさのあまり、大声を出した。その瞬間、身体から凄まじい炎を出した。その炎は渦を描きながら四方八方の竜に直撃した。一撃。竜達はその場に倒れてた。

「はあ……。はあ……。わ、私……。」

これが竜王の力か……。凄まじい……。こんなのに襲われていたのか……。今さっきまで……。とここで火炎が何かに気付く。

「あつ……。私気付いたのですが……。飛んだ方が早くありませんか？」

その手忘れてた。その手があつた！と頭をたたいた和人。早速、火炎の背中に飛び乗り、そのまま上空へと飛び立った。そして凄まじいスピードで青森県へと直行。数分で着いた。そして八戸市。ここで見たのは恐るべき光景だった。電柱はへし折れ、家は燃え盛る炎の餌食となっていた。車からも炎上し、辺り一面火の海と化していた。その光景を見た火炎はショックのあまりその場に跪いてしまう。……日本が……。どんどん壊れて行く……。疑わしい光景を見ながらそう思った。

## 第11章 消えゆく人間の姿 仲間までもが・・・

青森県の八戸市・・・と言えるのだろうか・・・。今となっては完全に火の海だ。この火災という名元人間の故郷である八戸市。また、1つの町が消えた事になる。予想的には福岡と鳥取が危ない位置に値している。そして青森県。日本はどんどん破壊されていく。そして故郷を失った火災は未だに俯いた。大粒の涙を溢していた。その表情を見て心が痛む。頭を抱え黙りこむ和人。でもこんな所できよくよしている暇はない。一刻も早くこの被害を全国に広めない様に食い止めないと・・・でもどうしたらいいんだ？自分の頭じゃ、いい案が浮かばない・・・どうしたものか・・・考えても周りの光景が考えを消し去ってしまう。その時だった、和人の名を呼ぶ声がしたのは。

「・・・村田？村田なのか!？」

「えっ!？その声・・・」

声のする方を見た。そこには長谷川の姿があった。頭や腕は血だらけで、足も引き摺っている。そうとうなダメージを覆っていた。急いで長谷川に駆け寄った。

「長谷川!？だ、大丈夫なのか!？」

「ははっ。俺は平気だ。お前こそ・・・元気そうじゃないか」

その格好でよく言えたなその言葉・・・。ひとまず長谷川を安全なところで寝かせないと・・・。和人は長谷川に肩を貸し、人気がない、役所へと入って行った。幸いにも役所は壁が壊れていただ

けで完全に倒壊はしていなかった。入ってすぐ傍にあったソファに寝かせた。とりあえず、傷を覆っている場所を包帯でグルグル巻いた。これで出血は止まるだろう……。和人は傍に座って長谷川のこれまでの経緯を聞いた。

「長谷川……。お前は どうして八戸市に？」

「あの後、お前と同じく、流されてしまったんだ。んで、気付いたら青森県八戸市。いい所だった……。そう昨日までは……」

「昨日……。まで？」

「悪夢は昨日の深夜突然襲い掛かってきた。1匹の竜が狂ったかと思えば他の竜もどんどん何かに支配されたかのように暴れ始めたんだ……」

「昨晚か……。完全に支配されてしまったのは……。ウイルスに抵抗することはできないのか……。でも、何か方法を考えないと皆、狂ってしまう。そうしたら日本壊滅はほぼ現実となってしまう……。でも、でもどうしたらいいんだっ！？くそっ！！！！」

和人は壁を思いつきり殴った。それに吃驚した火炎と長谷川が和人の方を見た。走り終わった様な息遣いをしていた。いい案が出ない事にいらついていた。無理もない。ここまでこれば精神的にも追い込まれてしまう。それと必死に戦っているのが和人なのである。

「村田……。大丈夫なのか？狂っていないか？お前は気に入らない事があると狂ってしまうからな……」

「ああ……。今もそうだ……。いい案が浮かばず、イライラしている」

「それが一番良くない事だ」

「!？」

「自分だけで問題を溜めこむなよ。ここにはお前の仲間がいるだろ？皆で考えた方が効率がいいんじゃないのか？」

「でも……」

「もつと仲間を信用しろ!!!」

和人はその言葉に圧倒された。仲間を信用する……。今まで自分の中で貯め込んできた問題。自分の力だけで解決しようとするから、いつも失敗ばかりだ。でも皆とやれば成功率は上がる。それに今気づいた。心が解放されたような感じになった。

「そうだな……。仲間を信用することは大事だからな……」

「村田……」

「村田……。さんつていのですね？あの……。その抱えている問題とは？」

和人は自分の中で貯め込んでいた問題を火炎と長谷川に話した。すぐに意味を理解したようだ。簡単に言うと、日本をどう守るべきかという事だ。でも、日本はこう見えて結構広い。他の県に目を回す事はとても難しい事だ。考え込もうとしたその時だった。役所は突然大きな揺れに襲われた。それと同時に壁が破壊された。その先に立っていたのは竜。狂った竜。マジでやばい状況だ。何の躊躇もな

く和人達を襲ってきた。何故か避ける事もせず、突っ込む。止めようとする火炎の言葉に耳も貸さずに。目と鼻の先に到達したとき竜は鋭いかぎ爪を振りかざした。それを紙一重で避け、身を縮めるとそのまま竜の足を蹴とばした。竜はバランスを崩して、目の前に転倒した。足払い。和人はこれを狙っていたのだ。

「今のうちに逃げるぞ!!!」

火炎は長谷川と和人を乗せ、低空飛行をしながら逃げる。しかし、すぐに追いかけてきた。もの凄く厄介だ。竜はプレスを乱れ打ち。それを避ける火炎。しかし、中は女という事もあるのかすぐに体力が限界に足したようでスピードが落ちてきた。竜は距離を縮め、そしてすぐ後ろに付いた。火炎の尻尾を握りつぶそうとした時だった。これはまずいと思った和人は竜の腕に踵落とし。痛がったのか腕をひっこめた。その瞬間、竜が口を開いた。

「グワア……ム……ラタ……」

!?今何か言った?辛うじて聞こえたが、何を言っているのか分からなかった。しかし、その後も竜は辛そうな声で何かを発してきた。

「ニゲロ……ム……ムラ……タ」

ムラタ?……村田!?自分の事!?何故自分の事を知っているんだ?どうして?

「お前……一体何者だ?」

「グワアアアア……ヒヤマ……ヒヤマダ……グギヤアアアアア」

松山！？確かにそうだった。という事は……この竜は松山でことなのか！？いや驚くほどでもないだろう……いつ感染してもおかしくない……。松山も感染し竜となってしまったんだ。そして今は完全支配される一歩手前。辛うじて自分の意識を保っているようだったが、今の咆哮で完全に意識が囚われたようだった。目を光らせ襲ってきた。あまりにもいきなりだった為、攻撃をかわす事が出来なかった。かぎ爪は和人の服、そして皮膚を切り裂いた。吹っ飛ばされた。流血。血が出る場所を手で押さえた。痛みを堪えながら、立ち上がった。竜は容赦なく和人に攻撃を仕掛けてくる。このままじゃ……。死んでしまう。その時、火炎がブレスを放った。ブレスは竜にクリーンヒット。怯んだ。和人は未だという気持ちとすまないという気持ちを入り混ぜながら、竜の顔に膝打ちを喰らわせた。勢いが強かったのか竜は顔を地面に思いつきりぶつけた。そして動かなくなった。気絶したようだった。普通なら安堵の気持ちを浮かべるが、和人は眼からは涙を流していた。しかし、見せる事は出来ない。すぐに拭き取った。

「村田？どうしたんだ？」

「いや、何でもない。それより、早くこの町から出た方がいいと思うな。うん」

「村田さんの言うとおりですね……。ここを離れた方がいいかもしれないですね……」

という訳で村田の案を採用し、その場を離れる事にした。上空から見て、もつと青森の事が分かった。ほとんど町が壊滅していて、空は黒い雲で覆われていた。まさに地獄絵図。和人達はすぐにその場を離れ、高さ4000メートルのところを飛行していた。しばらく

は普通の景色が続いていた。向こうの方には富士山が見える。こんな状況の日本の中でも堂々とそこに連なる飛騨山脈。まあ、凄い事。空から見たらこんな感じなのかと、気分転換も兼ねて景色を見ていた。そのまま飛行していると目の前に途轍もない高さのフェンスの様なものが見え立っていた。その場所は・・・京都、大阪などを含む近畿地方だった。和人達は内部の京都府に降り立った。そこには多くの竜が身を震えさせていた。

「……………こいつら、他の県から逃げてきた奴らじゃないのか？」

「そうだろうな……………でも大丈夫なのか？いきなり狂ったりしたら……………」

「村田さん……………あれのおかげじゃないのですか？」

火炎が指さす方向には注射を持つ竜の姿。1匹1匹に注射を打っていく。その注射の正体は傍の立て札を見て分かった。発狂防止薬提供中。人間の頭脳はどこまで進歩しているんだ！？見もしないウイルスの対抗薬を作り出してしまっなんて……………半端ねえ……………それはそれでまあ……………日本壊滅阻止への一歩だと思う。とここで1匹の竜が話しかけてきた。

「君達！？未だに感染していないのか？」

「え？まあ……………感染していないな」

「てかしていないから人間の姿なんだろう？」

「そうか……………君たちは凄い免疫力を持っているんだ……………うん君だけ」

その竜は和人を指さした。なぜ自分だけ？人間はここにも……はいでた。気付かないうちにこれかよ。長谷川……なぜ何の前触れもなく竜になってるんだよ。一言、ちゃんと宣告してくれ。  
By村田和人

「とうとう、俺も……か」

「はいはい……吃驚する余裕もなかったよ……」

「まあ、ここにいれば問題ないし、竜になった君も注射を打てば発狂はなくなるはずさ。まあ、ゆっくりしたまえ、ここは安全な領域だからな」

そういうと立ち去った。ここは安全地帯か……ひとまずほっとする和人達。しかし、こんな事で大丈夫なのだろうか？他の県はどうなっているのだろうか？と思った矢先のことだった。突然のサイン音。皆がパニくりだした。その後、スピーカーから声。

緊急事態発生、フェンスが破壊され発狂竜が攻撃を仕掛けてきました。直ちに避難してください

全く……何処が安全何だか……まあいい。あいつ等の足を止めてやろう。長谷川と火炎にアイコンタクト。理解した2匹はすぐに飛行準備。和人は長谷川の背中に飛び乗った。そして上空へと舞い上がる。目指すはフェンスが破壊された滋賀県東近江市。

## 第12章 最初の絶望

滋賀県上空。思った以上の被害。家は地震が起きたかのような崩れ様。まるで阪神淡路大震災。その上空では竜同士が戦っている。侵入してきた竜と勇氣ある竜の戦い。しかし、力は侵入してきた竜の方が上回っているのか、ほとんどの者がやられ、落下していく。それを見ていた1人と2匹はすぐに応戦。まずは長谷川が竜へと突っ込んでいく。相手の竜の攻撃を華麗に避けると竜の脳天を思いっきり殴った。気絶したのかそのまま落下していく。しかし、こんな事で安心はできない。今の竜の数。裕に50匹は超えている。火炎もすぐに応戦。炎を操り、相手竜へと放つ。5匹の竜にクリーンヒット。1匹1匹確実に倒していく長谷川と火炎。とここで、長谷川が後をとられてしまった。気付いた時には既に目と鼻の先だ。とここで背中に乗っていた和人がここにきて拾ったと思われる鉄パイプをバットのようには振った。竜の左頬を直撃。歯が折れた。怯み退いた。

「助かったよ、村田」

「お礼は後にした方がいいぞ！ほら、やばい事になったぞ！」

長谷川の周りは10匹ほどの竜に囲まれていた。逃げ場がない。竜達は一斉に突っ込んできた。和人がこの状況を把握し、長谷川に指示。

「長谷川！頭を下げる！！！」

長谷川は和人の言う通りに頭を下げた。和人は鉄パイプを持つ手に力を入れた。竜達がすぐ傍まで来た時だった。足の軸を確認すると、身体をねじり、そのまま高速回転。鉄パイプは突っ込んできた全て

の竜の顔にヒットした。さっきの鉄パイプの威力とは桁外れだったのか吹っ飛ばされた。数匹は地面に叩きつけられて砂煙が上がっていた。鉄パイプ、恐るべし威力。そう思った和人。もっと驚いている長谷川。こんな力があつたのかという顔をしていた。

「お前、どんな力を秘めているんだよ……」

「ただ単に戦っているだけだ。相手が竜だろうと怯まないぜ？」

「さすが、無謀男」

「誰が無謀男だっ!!」

とやり取りしていたのが仇となつてしまった。近づいてきた竜に気付かず、攻撃を喰らってしまった。どちらが攻撃を受けたかつて？ 和人の方だ。長谷川は何とか身をかわしたが、いきなりの行動に和人は背中から落下。その瞬間、竜のかぎ爪が和人の背中を引き裂く。勢いは凄まじいもので、数キロ離れていた琵琶湖に一直線に落ちていく。水面に到達した瞬間、巨大な水飛沫を上げた。

「む、村田!!」

和人が飛ばされた方を見ていた長谷川に襲撃する竜。かぎ爪は長谷川の腹に突き刺さっていた。

「ぐはあああ!!!!は、放せ!!!!うぐあ……」

徐々に意識が薄れていく長谷川。数秒後に意識を失ってしまった。

琵琶湖に叩きつけられた和人は自力で陸に這い上がった。ダメージが大きかったのか、その場に倒れ込んでしまう。息は荒く、長い距離を走り終わった様な感じになっていた。しかし、このままじゃ、ここがやられてしまう。和人は力を振り絞って身体を起こした。その先には1匹の竜が立っていた。長谷川だ。腹からは血を流している。あの時に傷が深かったようだ。長谷川は和人に近づいてきて一言放った。

「……シネ」

「!?!?」

長谷川は右腕を振り回してきた。力が出ず、避ける事が出来なかった和人はそのまま攻撃を受け、数10メートル飛ばされてしまった。身体が地面に擦れて血が滲み出てきた。和人は辛うじて残っている力を出し、身体を起こした。今、何が起こったのか一瞬で読み取ることができなかったが、すぐに理解した。しかし、それと同時に疑問も浮かんだ。あの時、注射をしたはずなのになぜ？なぜ竜に支配されているんだ？どうしてだ？

「ソノカオ、ドウシテカツテイウカオダナ……。イイダロウ、オシエテヤル。ホカノリュウカラコウゲキヲウケレバ、ヨボウノチカラヲハルカニコエルどころん・ういるすガナガレコム。ソレデイマノオレガイルンダヨ」

「……よく理解ができた。お前を攻撃した竜も許せないが、長谷川を支配したお前も許さないっ!?!?!」

和人は痛い事なんて忘れ、突っ込んでいく。そして、攻撃するが、素早過ぎて攻撃が当たらない。和人は懸命に攻撃を放つが、それはいとも簡単に避けてしまう。そして、反撃されてしまう。まず、左拳が和人の腹を直撃。そして、怯んだ和人の身体を握りしめ、そして地面に叩きつけた。凄い音と共に砂煙が舞い上がる。その砂煙から和人が突っ込んでくるがその勢いを利用してしまった。気付いた時には竜のかぎ爪が和人の腹を貫いていた。

「ぐはあつ！！！！」

「ヨワイ・・・ヨワイゾ！！！」

竜は和人をかぎ爪に刺したまま翳した。痛みが強くなる。和人は必死に抜こうとするがびくともしない。体力が徐々に消耗されていく。そして意識がなくなりそうになった時、地面に再び叩きつけられた。和人は仰向けになったまま、息を切らしていた。そんな和人に近づく竜の姿。火炎だ。よかった、助かった！しかし、その考えはすぐにかき消された。火炎は和人の頭を鷲掴みにした。そして思いつきり地面に叩きつけた。本日4回目の叩きつけ。正直耐える事ができなかった。和人は意識を失い。その場に倒れていた。頭からは血を流していた。

「コレデ・・・ワタシタチノセカイニチカツイタワ」

「ソウダナ」

そんな和人をしり目に2匹は飛び去ってしまった。

夜を迎えた。それと同時に和人の意識が戻った。痛みも一緒に戻ってきた。頭を押さえながら立ち上がる和人。しかし、フラフラして足元が覚束ない。和人は押さえていた手についていた血を見て、ため息をついた。同時に悲しみが一気に込み上げてきた。また、仲間を失ってしまった。守る事ができなかった。どうして、どうして自分はこんなにも役に立たないのか……。自分の不甲斐無さに愕然としていた。そんな和人に近づく影。気配に気づき、警戒しながらその方を見た。エクセレントだった。

「エ、エクセレント……」

「どうしたの！？血だらけだよ！？」

和人はこれまでの事を話した。話の最中にエクセレントは和人の傷ついた身体の手当てをし、頭には包帯を巻いた。話は手当てが終わったと同時に終了した。

「友達を奪われてしまったんだね……」

「ああ……正直、自分の不甲斐無さに……」

「でも、このまま落ち込んでいるつもり？」

「……そんな事……できる訳ないだろ……でも、身体が……いう事を聞かない」

「結構な怪我だったからね……普通だったら重症の領域だよ？君って強いんだね……」



**第13章 世界を救う近道&漫才???(前書き)**

題名は気にしないでくださいな・・・

### 第13章 世界を救う近道&漫才???

竜界の森林地帯。そこに和人とエクセレントの姿があった。焚き火の周りに座っていた。和人は痛がってははいないものの身体を自由に動かす事はまだできない。しょうがなくその場でじっとしていた。茫然と空を眺めていたら、ある点に気付く。おかしな点に。

「なあ、エクセレント」

「ん？何？」

「お前って竜王だよな・・・」

「そうだよ？何？今更どうしたの？」

「あの時、自分がエクセレントに情報を聞き出して来いって言った時だ。あの時、騒ぎとかなかったけどどうしてなんだ？普通だったら竜王が目の前に出てきたら吃驚するものだけだね・・・」

「ああ、その事？それはね・・・この竜界には竜王の姿が分からないからなんだ」

その言葉にどう突っ込んだらよいものだろうか・・・。姿が分からない？それって今の今まで普通の竜の目の前に姿を現した事がないってことだよな？そうなるよな？自分の推測が正しければ・・・。

「今の今まで僕達は姿を晒していないんだ。だから竜達は僕達がどんな姿か分からないんだ」

普通、その姿と装飾品見たら分かりそうなものだけだな・・・まあいいや。

「もう一つ。引つ掛かる事があるんだけど」

「何？」

「火炎の件だ。あいつは記憶を失った火竜王かもしれないし、元々が人間で竜王になったという事もあるけど、この考えは火炎が記憶を失った火竜王だったらの話だ。それだったらあいつは竜の身体を持つ者になる。それなのにどうしてウイルスに感染してしまったんだ？」

「ん〜つとね・・・今の火竜王は記憶を失って自分の事を人間だと思っている。このウイルスは人間の脳の働きを察知して感染するものなんだ。だから火竜王は今人間の頭脳だから感染したんだと考えられる・・・これはあくまでも僕の説だけだね・・・」

そうだとしても火炎が感染した事に変わりはない。あの力が日本にぶつかるの大変な事になるのは分かっている事。早く手を打ちたいところだけど、今はウイルスをばら蒔いた奴を発見することが近道かもしれない。でも手掛かり一つない。こんな状況どうしたらよいものだろうか・・・。パズルゲームだったらいいのにな・・・まあ、絶対にあり得ない事だけど・・・。

「で、これからどうするつもりなの？」

「今の考えの中では、ウイルスをばら蒔いた奴を捜そうと思っっている。人間界から発症したとは考えにくいし。それをばら蒔いたのが人間っていうのも考えにくい。そうだとしたら竜の中にいると考え

るのが妥当だと思う。だからまず、この竜界を探索して手掛かりを見つけて行こうと思うんだ。それと、このほかの竜王も捜さないといけないしな……」

「あ、ほかの竜王の事忘れてた」

「うおー!!?」

「つい……あははは」

「あははは……じゃないだろ!!!!!」

「いつものテンションだね(笑)」

「……煩い」

「まあ、そのテンションの方が君に似合っているよ。落ち込んだ君はかつこ悪いからね」

「褒めているのか……軽蔑しているのか……」

「まあ、君の考えは分かったよ。僕も協力するよ。このままじゃ、こつちにも被害が出そうで心配だからね」

「ありがとう」

「じゃあ、まず……」

「ん?」

「じゃんけんしようか？」

言っている意味が分からないんですけど・・・何？急にじゃんけん？どついう事ですか？こんな真夜中で森林の中。自分とエクセレント。この状況の中でじゃんけんですか？思考が壊れそうなんですけど、エクセレント・・・。

「負けたら、明日早起きね」

「そんな事でじゃんけんするのかい！早い奴がまだ寝ている奴起こせばいいじゃないか！」

「それじゃ、面白くないんだもん」

「（面白い）ここでは必要ないからっ！！」

なんだかんだいっていたけど結局じゃんけんをする羽目になった。結果、自分が負けた。まあ、こうなるだろうとは思っていたよ・・・まあ、いいや。とんでもない時間に起こしてやるうじゃないか。ってもう寝ているし・・・。じゃんけんをし終えたエクセレントは既に夢見心地。寝るのは早い・・・。和人は火をつけたまま、身体を横にした。しばらく考え事をし、眠りにつく。

「エクセレントっ！！！！起きろっ！！！！」

バッコシーン

「うぎゃあ！！痛い！！痛い！！！！」

「お前な〜・・・これでエクセレント叩いたの23回目なんだけど」  
何故か和人の手にははりせん。それで思いっきりエクセレントを叩いていた。理由は簡単。耳元で叫んでも揺すつても起きない。仕方なく強行手段。結果的には24回目で起きた。えっ？はりせん？持っていた紙で作った。そんな大きな紙何処にあるのかって言いたくなると思うけど。そこは流して・・・。因みに現在時刻。5時10分。まだ辺りが暗くひっそりとしていた。

「いくら何でも早すぎない？」

「だって、目が覚めてしまったから」

「だからって無理やり起こす？」

「その為にじゃんけんしたんでしょ？」

エクセレントは渋々、身体を起こした。もうその姿、竜王とは思えない寝起きの姿。

「エクセレント・・・お前、竜王だよな？」

「竜王だよ？精神年齢、9歳！」

「自分で精神年齢言っただんじゃねえよ！！！！」

「情報は必要でしょ？」

「今のはどうでもいい情報だよ！どう考えても状況は進展しないだ



「イン・・・フェ？何それ？どっかの劇団かなんかか？さっぱり分からないんだけど・・・」

そういつた瞬間、竜達が武器をおろした。どういう事？何？えっ？インフェクト団って何だよ？

「すまない。お前がインフェクト団だと思って・・・」

「だからそのインフェクト団って何だよ？何かこの竜界と突っ掛かっているものか？」

「インフェクト団。感染団体だ。人間だけで構成されている組織だ」

「人間・・・だけでか？」

「まあ、武器を向けてすまなかったな。お前は見た感じ悪そう人間ではないな・・・後ろに竜がいるっていう事は竜とも仲がいいみたいだしな・・・ようこそダルク町へ」

「見た目判断かよ・・・まあ、いいや。エクセ・・・まだ寝てるのかよ！！！！！！」

「zzzzzz」

「起きろやーーーー！！！！！！！！」

バッコシーン

再びはりせん。思いつきり引っ叩いた。痛がりながら目を覚ました。

その場を転がりまわる。それを見ていた竜達は笑っていた。一つだけ言っておきます。漫才じゃありませんからねっ！！！！

## 第14章 インフェクト団の脅威？

とりあえずだ。まあ、何と言いますか。襲われると思ったらインフェクト団じゃないと言ったら襲われなかった。この町はその組織に脅えているようだな。まあ、見過ごす訳にもいきそうにない組織だ。何故って？感染という言葉が挙がったからだ。今現在の日本と何か関わりがありそうだ。そいつらから色々聞きだしたいところだけど、活動範囲も潜伏場所も分からない。この町で聞き込みをすれば何とかなるかな・・・と思ったんだけど・・・今は家内部。さっき自分を襲ってきた竜・・・に連れていかれてここは町長の家・・・だと思われる。

「人間とは吃驚だ・・・しかもインフェクト団ではないと」

「必ずしも人間がそのインフェクト団やらに絡んでいるとは考えにくいが・・・」

「おお、申し遅れたな。私はジム。この町の長。そして君達を案内してくれたのが副町長のクエート」

「ええ〜つと自分は村田和人・・・」

「僕はエクセレント」

「お前は普通の竜なのか？やたら装飾品をしているが・・・」

「僕は・・・5大ry・・・」

「どわああ！！！！エ、エクセレントは普通の竜だ！！」

「ええ！ちよ……」

和人はエクセレントの耳元で囁いた。

（お前な……今ここで5大竜王なんて言ったどうする？信じないかもしれないけど。万が一吃驚してとんでもない事に発展したらめんどいだろう？）

（た、確かにね……）

「あはは、僕は普通の竜です」

「ところで、何でここに連れてきたんだ？町長の挨拶だけですか？」

「その通りだ」

「でしょうね……」

まあ、大体予想はできていた。では、こっちから質問しますか。じゃないと始まらないから。

「町長。1つ聞きたい事がある」

「なんだ？」

「さつきも出たけどインフェクト団の事についてだ。あいつ等、ここでどんな事をしているんだ？」

「インフェクト団か……私はよくは知らないのだ……」

「その件は俺が話そう。あいつ等はこの竜界にとっては敵中の敵だ」

「そんなに悪い奴らなのか。まあ、大体予想はつくけど」

「あいつ等は、町を襲い、竜達を襲い、そして連れ去っていく。たかが人間に何故俺達竜がやられなきゃいけないんだと思うが、正直あいつ等には太刀打ちできないんだ・・・」

「何故？自分と同じ人間なんだろう？」

「いや、桁が違いすぎる。あいつ等は武器のプロフェッショナルだ。相手の攻撃を読み武器を使いこなしてくるんだ。勿論武器だけではなく。ロボットを駆使して戦ってくる奴もいる。俺が確認しただけでも、200名入る」

「結構いるんですね・・・」

「既に12もの町村がなくなっている。ここも危うい状態だったが、なんとかなった」

「だからあちこちの建物が損傷を受けていたのか・・・墓もあちらこちらに見えたけど・・・」

「奴らに殺された竜達なかまだ・・・」

そこまで聞いただけで腹が立つ。何とも酷い奴らだ。武器を使つてまで竜達を殺したり連れ去ったりする意味は何処に芽生えてくるんだよ。おまけにもしかしたら、ドラゴン・ウィルスに関わっているかもしれないしね。

「しかも、その中には、ユルも・・・」

「ユル？」

「・・・俺の婚約者だ・・・」

「・・・酷い・・・なんて奴らだ・・・こつちにも被害を与えているかもしれないのに・・・」

「どういう事だ？」

「自分の住む日本。今現在、ドラゴン・ウィルスが蔓延している。でも、今となつては日本も市の世界に等しいな・・・生き残りは確認できるだけで自分だけ。あとの奴らは完全に竜の支配下。手遅れかどうかは分からないけど、あいつ等から色々な事を聞き出したい。どうしてそんな事をしたのかを・・・」

「人間界も大変な目に合っているのだな・・・」

「あいつ等の活動範囲とか、潜伏場所とか知らないか？」

「知つてどうするつもりだ？そこに乗り込もつていうのか！？止めとけ。お前がかなう奴等じゃない」

「分かつてるよ！！！！分かつているさそんな事！！！！でも、仲間を救いたいんだ！自分の仲間を！」

「和人・・・分かつた。でも、活動範囲も潜伏場所も分からない。今からほかの町の竜達にも伝えて捜査させる。発見次第、和人に伝

える。ただし、乗り込むときは俺達も同行する」

「……ありがとう……」

「勿論、僕も行くよ」

「ありがとう……」

みんなの意見が纏まった時だった。

ズドン

外で大きな音が響いた。和人達は急いで外に出る。そこに広がっていたのは無残に壊れた建物と横たわる竜達の姿。出血している竜もいれば体の一部が吹っ飛んだ竜もいる。何ともおぞましい光景。和人は辺りを見渡した。そして発見した。右手に見えるロケットランチャーを持った1人の人間。武装していて胸にはエンブレム。インフェクト団を示すものだと思われる。そいつはすぐに自分に気付いた。そしてにやりと笑った。

「これは驚きだ……人間がまだいたとはな」

「お前、インフェクト団の一員だな。そしてその言葉……」

「おや？どうしたのか？君には危害を加えていないはずだが？」

「じゃあなんで、過去形なんだ？もし危害を加えていないのなら人間がいるとは驚きだな」とかが妥当じゃないのか？」

「気付いたか……お前も満更馬鹿じゃないんだな」

「煩い。お前らやっている事は卑劣な行為だ！」

「へえ〜そんな口が聞けるのか。俺達の計画を阻止しようとしているのか？」

「どんな計画か分からないがその計画、ぶっ潰してやる」

「へ、お前は消さないといけないみたいだな」

そういうと、剣をとりだした。刃が光で光っている。しかし、和人は動じる事はなかった。寧ろ上等だという顔をしていた。

「どうした？怖くて動く事も出来ないか？」

「それはどうでしょうかね？」

「じゃあ、消えろ！」

剣を振り回しながら、向かってきた。そして剣が和人の目の前まで来た。

「和人！危ない！！！」

しかし、和人はその剣をいとも簡単に避ける。その素早さにインフエクト団の一員は吃驚した表情を浮かべていた。

「お前・・・何者だっ！！！」

「別に？ただ身体能力が高いつつただけですが」

「くそが!!!」

剣を振り回しながら襲ってくる。しかし、全ての攻撃を避ける。そして、思いつきり顔を蹴とばした。数メートル飛ばされるインフエクト団の一員。今更だけど、こいつは結構頭が悪い方なのかもしれない。さつきクエートが言っていた事とは全く逆だ。ただの馬鹿だ。それしか言いようがない。うん。

「お、覚えてい%&\$#!!!」

言えてないし……まあ、何とも無様な姿……。逃げる姿はまた無様……。

そして数秒、ほかの竜達から歓声と拍手が聞こえてきた。みんな和人の方を見ていた。

「すごいぞ!人間!!!」

「この町を救ってくれてありがとう!」

「ヒーローだ!この町のヒーローだ!!!」

大袈裟じゃいか?たかがあいつを倒しただけだけだぜ?そんなにすごい事なのか?まあ、みんなが喜んでくれたからいいか……。

「和人、お前は凄い奴だ。正直、弱いかと思っていたよ」

「まあ、大体の竜はそう思うよな」

「お前がいたらこの竜界も救われるかもしれない……」

「そのつもりさ。こっちに来たのも日本を救うのこの竜界を救う事だからね」

「そうなのか？」

「まあ、事情までは言えないけど、この世界を救ってやるさ。この世界も少しづつだけ滅亡に傾いているはずなんだ。エクセレントの話によると」

「そうなんだよね・・・情報の入手先は伏せておくけどね」

(口に出すなよ・・・)

とここである事に気付く。あいつ追っていれば潜伏場所に行けたはず・・・失敗した・・・。

まあ、とりあえず、これはこれでいいか。あいつ等のやっている事は分かった。絶対に許さないぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4383o/>

---

ドラゴン・パニック ～竜化症候群～

2011年1月28日18時23分発行